

特別史跡及び特別名勝 巖 島

宮島町屋跡 西大西町第1地点 発掘調査報告書

—(仮称)巖島美術館建設に伴う発掘調査の記録—

2009年

廿日市市大西町発掘調査団



ほくちお
博奕尾からみた調査地点（東から）



石垣・丸太材検出状況（北から）

序 文

この報告書は、(仮称)厳島美術館の建設に伴う発掘調査の記録をまとめたものです。

厳島(宮島)は、広島県の南西部に位置する周囲約 30 km、面積約 30 平方 km、そのうちの約 96%が森林でそのほとんどが国有林となっている島です。全島が特別史跡及び特別名勝、島に存在する厳島神社の社殿や建造物、また各寺社伝来の什宝類は国宝・重要文化財に指定されている文化財の島でもあります。

また、自然公園法(瀬戸内海国立公園)や都市公園法(宮島公園)、森林法など各種の法律によって全島が保護され、平成 8(1996)年の「厳島神社」の世界遺産登録では、全島が遺産保護のための緩衝地帯(バッファ・ゾーン)になっています。

今回の発掘調査は、厳島神社の西方、大西町で実施したもので、市街地や町屋の形成と住民の暮らしの変遷の解明の一助となれればと期待しています。

この発掘調査にあたって、ご指導とご支援をいただきました広島県教育委員会や、発掘調査の意義をご理解いただき、ご協力をいただいた県内の文化財担当者有志の方々に記して深く感謝の気持ちを表します。

なお、調査団の副団長の河瀬正利氏が、発掘成果を見届けることなく平成 20 年 6 月 14 日逝去されました。謹んでご冥福をお祈りします。

平成 21 年 3 月 31 日

廿日市市大西町発掘調査団

団長 桜井正弥

例 言

1. 本書は、(仮称)厳島美術館(広島県廿日市市宮島町6他)の建設計画に伴ない、平成20年8月～10月に実施した「宮島町屋跡 西大西町第1地点」遺跡の発掘調査の報告書である。
2. 発掘調査は、廿日市市大西町発掘調査団が担当し、県内の文化財担当者有志の協力を得た。
3. 本書の編集は、是光吉基と百瀬正恒(国際文化財株式会社)及び調査団事務局が行い、執筆は、岡崎環(Iはじめに、II位置と環境)、田宮憲明(III調査の概要)、稲垣正宏(IV検出遺構)、百瀬正恒(V出土遺物—土器・陶磁器)、藤田広幸(V出土遺物—土製品・古銭・青銅製品・鉄製品・石製品)、是光吉基(VIまとめ)、古環境研究所(付載—自然科学分析)が分担した。
4. 遺構及び遺物の実測と写真撮影は国際文化財株式会社が行い、脇山功氏の協力を得た。
5. 測量は座標系Vで行い、図中に座標北を示した。標高はすべてTPである。
6. 本書を執筆するにあたり、廿日市市文化財保護審議委員である関太郎・鈴木盛久(比治山大学)・海堀正博(広島大学)、また村上勇(奥田元宋・小由女美術館)、岡村博美(宮島水族館)、広川和男(伝統工芸師)らの諸氏にご教示を賜った(所属は調査当時)。
7. 発掘調査に係る資料(遺構・遺物実測図、写真、遺物等)は、廿日市市教育委員会、及び廿日市市立宮島歴史民俗資料館で保管している。

目 次

I はじめに	1
II 位置と環境	3
III 調査の概要	6
IV 検出遺構	9
1. 近世～近代の遺構	
2. 中世の遺構	
V 出土遺物	22
1. 土器・陶磁器	
2. 土製品	
3. 古銭	
4. 青銅製品	
5. 鉄製品	
6. 石製品	
VI まとめ	34
1. 近世の町屋の復原	
2. 中世の石垣(護岸)	
付載 自然科学分析調査報告書	41
付表	47

写真図版目次

巻頭図版	博奕尾からみた調査地点(東から)	石垣・丸太材検出状況(北から)
写真図版 1	調査地遠景 多宝塔より(南から)	調査地近景 経尾より(西から)
写真図版 2	東西方向土層堆積状況 西側(南から)	同上 東側(南から)
写真図版 3	貝層堆積状況 A-A' 断面部分(東から)	近世～近代遺構検出状況 南区(東から)
写真図版 4	近世～近代遺構検出状況 南区(東から)	近世～近代遺構検出状況 北区(東から)
写真図版 5	石組 6(南から)	石組 7・8(北から)
写真図版 6	石組 7 北壁(南から)	SE 1(南から)
写真図版 7	埋甕 2(東から)	埋甕 5(東から)
写真図版 8	建物跡【石列】全景(東から)	建物跡【石列】全景(北から)
写真図版 9	建物跡【石列】拡張区(西から)	建物跡【石列】拡張区(東から)
写真図版 10	建物跡【石列】石積状況(北から)	建物跡【石列 1～3】検出状況
写真図版 11	石垣・丸太材検出状況(東から)	石垣 西部(西から)
写真図版 12	石垣積石状況 西部(北から)	石垣(中)(東から俯瞰)
写真図版 13	石垣 東部(西から)	SK14～21(西から)
写真図版 14	土器・陶磁器 1	写真図版 15 土器・陶磁器 2
写真図版 16	土器・陶磁器 3	写真図版 17 古銭 表面
写真図版 18	古銭 裏面	写真図版 19 青銅製品、鉄製品
写真図版 20	鉄製品	写真図版 21 土製品、石製品
写真図版 22	石製品	

挿図目次

第 1 図	宮島小・中学生による遺跡見学	第 2 図	廿日市市宮島町の遺跡分布図
第 3 図	調査地点位置図	第 4 図	東西方向土層断面図
第 5 図	貝層南北方向土層断面図	第 6 図	建物跡【石列 2・3】検出状況
第 7 図	SK 1 実測図	第 8 図	SK12 実測図
第 9 図	土坑【石組 9】実測図	第 10 図	瓦溜 1・2 実測図
第 11 図	SE 1 実測図	第 12 図	石組 1 実測図
第 13 図	近世～近代遺構全体図	第 14 図	石組 4 実測図
第 15 図	石組 6 実測図	第 16 図	石組 7 実測図
第 17 図	石組 8 実測図	第 18 図	石組 10 実測図
第 19 図	石組 11 実測図	第 20 図	石組 12 実測図
第 21 図	石組 14 実測図	第 22 図	埋甕 1～8 実測図
第 23 図	建物跡【石列 1～3】実測図	第 24 図	石垣と丸太材(北から)
第 25 図	中世遺構全体図	第 26 図	SK13・14～21 実測図
第 27 図	土器・陶磁器実測図 1	第 28 図	土器・陶磁器実測図 2
第 29 図	土器・陶磁器実測図 3	第 30 図	土器・陶磁器実測図 4
第 31 図	土器・陶磁器実測図 5	第 32 図	土製品実測図
第 33 図	古銭拓影	第 34 図	青銅製品実測図
第 35 図	鉄製品実測図	第 36 図	金具 31 展開図
第 37 図	硯・砥石実測図	第 38 図	砥石実測図
第 39 図	石臼・石斧実測図	第 40 図	宮島町割図
第 41 図	石垣想定図		

表目次

第 1 表	廿日市市大西町遺跡発掘調査団組織名簿	第 2 表	土器・陶磁器観察表
第 3 表	土製品観察表	第 4 表	古銭観察表
第 5 表	青銅製品観察表	第 6 表	鉄製品観察表
第 7 表	石製品観察表		

I はじめに

本市は、平成 17(2005) 年 11 月 3 日に合併した旧宮島町の地域振興の一環として、新たな観光拠点の整備により、芸術文化の振興、観光地「宮島」のグレードアップによる観光客（外国人を含む）の増加・滞在時間の延長・宿泊客数の増加、宮島を核とした市全域の観光振興の効果が期待できることから、美術館の誘致を行うこととなった。平成 19(2007) 年 5 月西大西町ふれあい花広場を予定地とし、具体的な課題の整理及び文化庁、広島県教育委員会その他関係機関と協議検討を行った。

予定地のある地域は、中世に創建された大願寺に近接し、近世に刊行された『厳島道芝記』・『芸州厳島図会』等の絵図類には整然とした町屋の並ぶ風景が描かれており、島内の町の成立の初期段階に形成された地域と考えられている。そのため、建設予定地内の埋蔵文化財保護のための発掘調査の必要性が認められた。

1. 発掘に至る経緯

建設予定地の試掘調査は、平成 20 年 3 月 21 日付け 19 委庁財第 4 の 2125 号で現状変更許可を得て、広島県教育委員会の指導のもとで、廿日市市教育委員会が平成 20(2008) 年 3 月下旬より 4 月中旬にかけて 9 日間行い、その結果①近世の町屋跡にかかわる遺跡、②近世の町屋跡が成立する以前の遺構が確認された。特に②の中には、東西方向に一列に並ぶと考えられる幅 1 m 程度の石列が検出された。

この結果をうけて、県教育委員会の指導のもとで、延べ面積 1,070 m²の範囲の遺構確認のための調査が必要となった。そのため、廿日市市大西町発掘調査団（以下「調査団」という。）を組織して事務局を市教育委員会内に置き、平成 20 年 6 月 20 日付け 20 委庁財第 4 の 395 号の現状変更許可で発掘調査を実施した。

役職名	氏名	所 属	備 考
団長	桜井正弥	廿日市市文化財保護審議会	
副団長	関 太郎	同	植物学
副団長	河瀬正利	同	考古学
調査員	是光吉基		考古学
会計	依田光昭	廿日市市会計局長	
監査	宮郷晴督	廿日市市文化財保護審議会	
事務局長	岡崎 環	廿日市市教育委員会文化スポーツ課	
事務局次長	佃 雅文	同	
事務局員	田宮憲明	同	

第 1 表 廿日市市大西町発掘調査団組織名簿

2. 発掘調査

発掘調査は、平成 20 年 8 月から 10 月まで行い、出土遺物の整理作業を平成 21 年 3 月まで行った。調査期間中の 8 月 26 日、市教育委員会の廿日市キャリア・スタート・ウィーク事業の学習活動として、阿品台中学校の 2 年生 3 名が発掘作業を体験した。

また 9 月 9 日には、宮島小・中学校の 5 年生以上の児童・生徒約 60 名に対して、発掘現場で発掘作業及び検出遺構の見学指導を行った。

さらに 10 月 7 日には、宮島小学校の総合学習の一環として、児童による現地取材を受け、その成果は校内通信等に発表された。

そして、10 月 16 日には、廿日市市長及び廿日市市教育委員会教育長、広島県文化財保護審議会 広島特別部会委員による現地視察を行った。また、16・17 日の両日にわたり廿日市市文化財保護審議会委員が現地視察を行った。

3. 調査の経緯

今回の発掘調査では、遺構の検出等に際しては、広島県教育委員会に綿密な報告を行い、保存方法等について詳細な指導の下に調査を進めた。

調査にあたり、廿日市市文化財保護審議会委員である関太郎・鈴木盛久(比治山大学)・海堀正博(広島大学)の各氏には学術的指導を得ながら実施し、また木質遺物の分析は株式会社古環境研究所、貝類の分析は岡村博美・呼坂達夫(宮島水族館)が行った。

発掘及び遺物整理作業にあたっては、山下智美・桑原晴美・藤田広幸・荒木亮司・株式会社新竹建設の作業員各位の協力を得た。



第 1 図 宮島小・中学生による遺跡見学

II 位置と環境

厳島(宮島)は、推古天皇元(593)年創建と伝えられる厳島神社の鎮座する島として早くからその名は知られているが、文献的初見は弘仁2(811)年7月の条(『日本後紀』承和7(840)年成立)にある「安芸国佐伯郡速谷神、伊都岐嶋神」である。その後『日本三代実録』(延喜元(901)年成立)には昇叙の様子及び「伊都岐嶋中子天神」「伊都岐嶋宗形小専神」が記されるが、これら神社の建立場所等の詳細は明らかになっていない。

一方島内には第2図のような遺跡が分布し、菩提院遺跡・祝師屋敷跡遺跡等については発掘調査報告書が刊行され、厳島神社千畳閣納経堂跡等からの出土遺物も報告されている。こうした遺跡や遺物の調査により、古代・中世の厳島の様相が明らかになることが期待されている。

今回の発掘調査地域は厳島神社の西方に位置する大西町にあり、西部は経尾と呼ばれる標高約20mの岬状高地となり、南西部は弥山山系に連なる山麓部に広がる平地である。北側は弥山山系を源とする紅葉谷川と白糸川が合流した御手洗川が流れている。

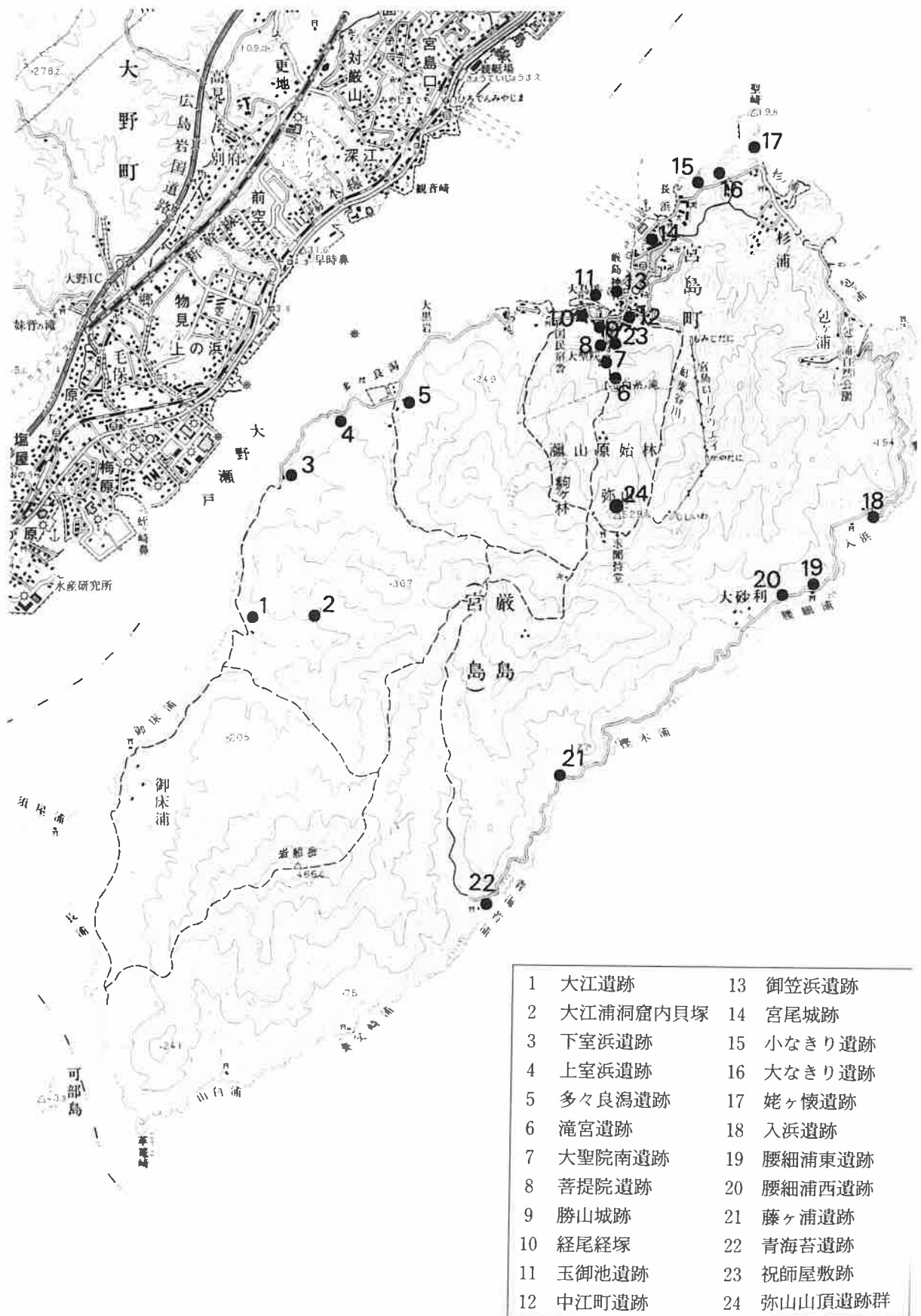
経尾は、安元2(1176)年10月に行われた伊都岐嶋一切経会を記した「伊都岐島社千僧供養日記」(浅野忠允氏旧蔵厳島文書2)に見える「西崎」と比定されており、ここから大鳥居、「宮崎」(豊国神社が存在する亀居山)の海上に棚を設置し燈火を点灯して「万燈会」を行ったとある。

その後『厳島道芝記』(元禄10(1697)年成立)には「経尾」という地名で記され、十王堂があり、先端部には平清盛が一字一石経を納めたと伝えられる経石があると記されている。また経尾に続く南部の高地には、地藏院(明治初期退転)や大永3(1523)年建立(『芸藩通志』文政8(1825)年成立)とされる厳島神社多宝塔があり、山麓には華蔵院(明治初期退転)・神厩(明治初期移転)があった。

近世をとおして、当該地域一帯は大西町と呼ばれ、大願寺・大蔵坊(明治初期退転)等の寺院が存在し、厳島神社廻廊出口から西に続く街路の両側には、間口が狭く奥行きが深い家屋の建ち並ぶ市街地となっていた(『芸州厳島図会』天保8(1837)年成立)。町屋の成立時期は明らかになっていないが、白糸川の扇状地に形成された滝町・中西町等とともに、近世以前に町屋が形成されていたのではないかと考えられている。

近代になると、盆や杓子の製作・販売に従事する人びとの住居、夏季の避暑として利用される家屋、また大元浦に通じる御手洗川沿いには観光客相手の土産物店等が建っていた。

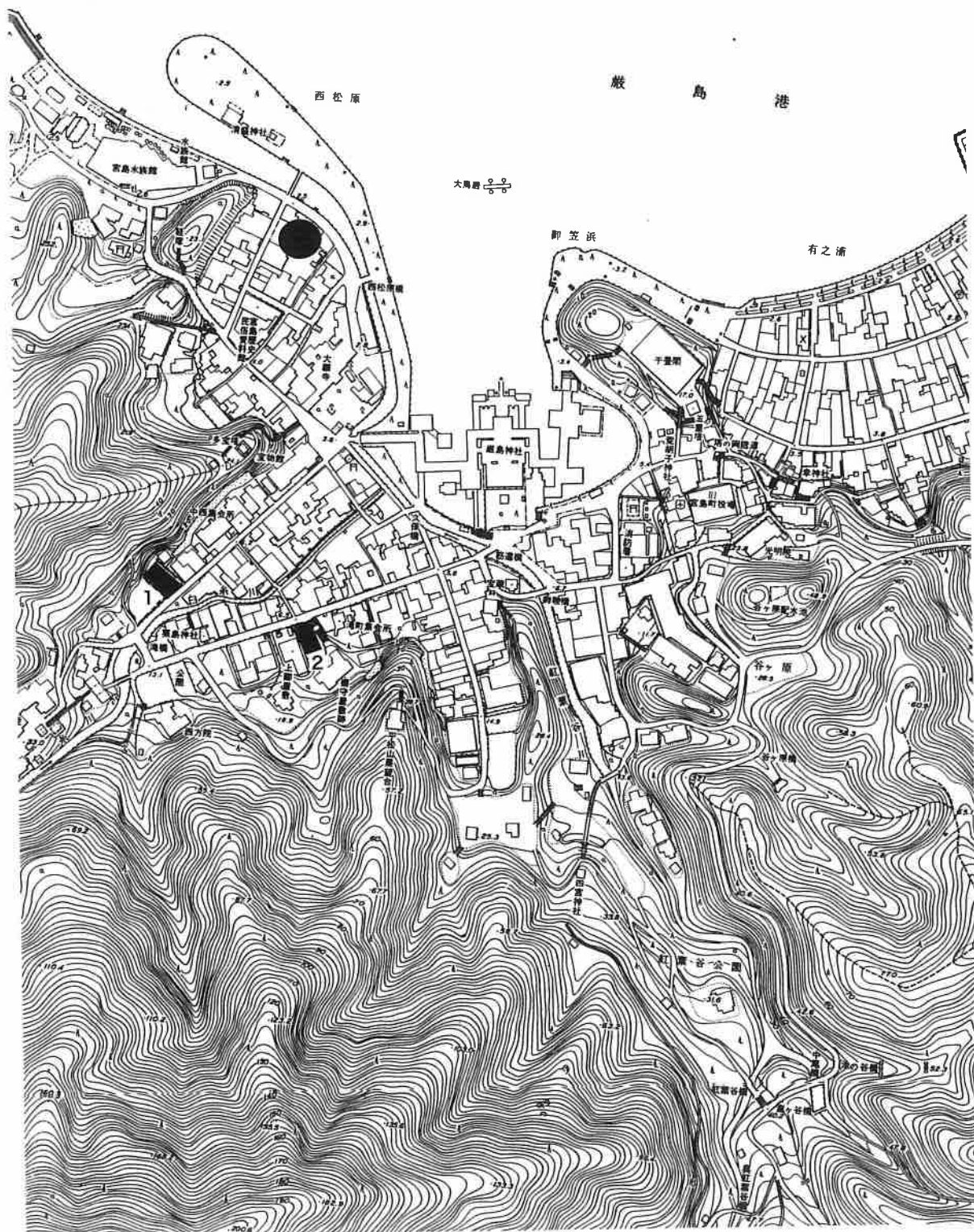
なお、御手洗川の右岸に伸延している西松原は、「知新集」(文政5(1822)年成立)に寛保3(1743)年「厳島社前新堤五十余丈築出し」石燈籠108基と大石燈籠1基を寄附したとあり、このとき築堤され、その後天明3(1783)年に流域内の「熊毛洲」を除去して移設が行われた(吉田家絵図)。さらに、昭和20(1945)年の枕崎台風により流出した土砂を利用して現在の形状に拡張整備された。



第2図 廿日市市宮島町の遺跡分布図(1:50,000)



- 調査地点
- 既調査地点
- 1 菩提院遺跡
- 2 祝師屋敷跡



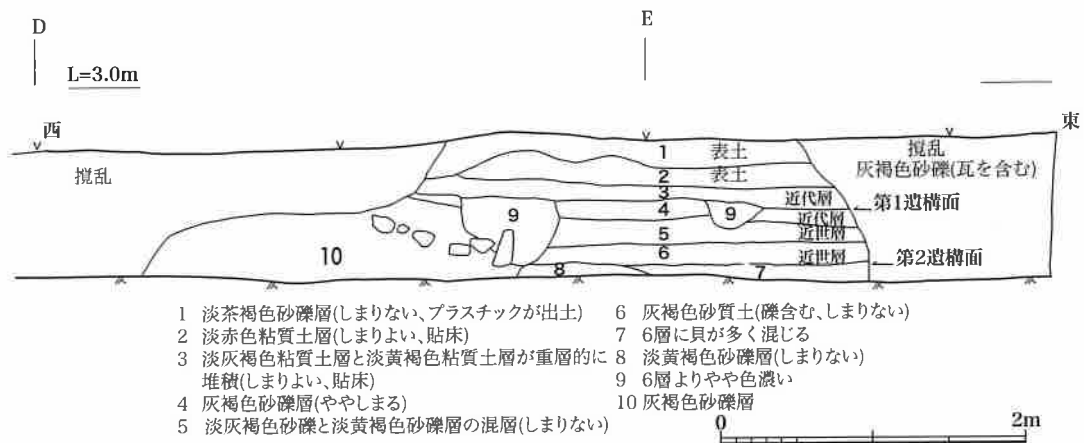
第3図 調査地点位置図 (1 : 5,000)

Ⅲ 調査の概要

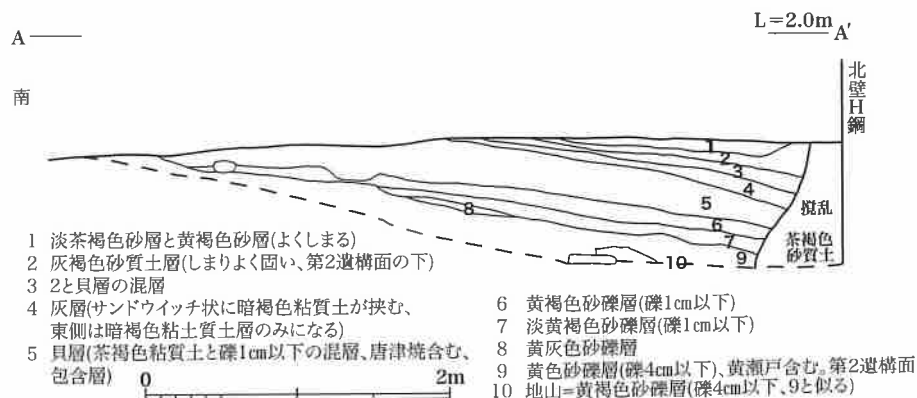
宮島町屋跡西大西町第1地点は、厳島神社廻廊出口に位置する大願寺から、大元浦の厳島神社撰社大元神社へと通じる御手洗川沿いの道路の脇に所在する。大願寺から西方約50m進んだところに位置するこの場所は、昭和40年代まで宮島保養所が存在し、その後建物は解体され「西大西町ふれあい花広場」となり、地域の人に利用されたところで、地形はほぼ平坦となっている。

この場所は、南北約50m、東西約40m、周囲については、北は御手洗川沿いの道路に面し、西は西松原に通じる御手洗川に架かる橋から宮島歴史民俗資料館へ通じる西大西町の通りに面しており、南は北大西町の町屋一帯に接し、東は北大西町を南北に貫通する小路に沿っている。

今回、この地が(仮称)厳島美術館の建設予定地となり、平成20年3月下旬から4月中旬にかけて、広島県教育委員会と廿日市市教育委員会が町屋遺構の有無の確認を目的として、試掘調査を行った。この結果、調査区西側で地表下約0.7mにおいて、整地層(焼土・炭化物の薄層を挟む褐色砂層)を確認、出土遺物として近世の瓦および貝類を検出し、直下のマサ土の層では、柱穴・土坑などを確認した。また、調査区東側から中央部にかけて、地表下約1.2mにおいて一辺1mを超える平ら



第4図 東西方向土層断面図(第13図I-I'、1:50)



第5図 貝層南北方向土層断面図(第25図A-A'、1:50)

な石が東西方向に並んでおり、街路あるいは護岸に関連する可能性も浮上した。

これらの試掘結果に基づいて、広島県教育委員会及び廿日市市教育委員会が協議を行い、要発掘調査範囲（近世以前と近代以降の2面）を設定し、延べ1,070㎡を調査することとした。

現地の調査は、有識者で構成する廿日市市大西町発掘調査団（事務局は廿日市市教育委員会）が平成20年8月から10月まで実施し、引き続き、平成21年3月まで整理作業を行った。

調査は、東西方向中央部に畔を残して、南北に2分割し、畔の壁面を利用して土層の観察を行いつつ、北側（海岸側）を北区、南側（弥山側）を南区とそれぞれ呼んだ。

調査範囲は、南北約20m、東西約35mで、面積は約700㎡、延べ調査面積は1,070㎡となる。

発掘調査の結果、宮島保養所建物の地下部分以外の場所で、近代、近世、中世の遺構が検出された。

まず、最初の調査として、東西方向土層断面の観察を行ったが、宮島保養所をはじめ近代以降の開発や試掘調査によって、ほとんど攪乱等を受けていた。それ以外で土層を確認できる箇所を観察したところ、第1層（表土層）から最下層の第10層まで8層の土層を確認した。

上位の第2層から第6層までは、黄褐色砂礫層、淡灰褐色粘質土層と淡赤褐色粘質土層の重層、灰褐色砂礫層を形成し、第5層は灰褐色砂礫層で井戸を検出し、ここまでの層を近代の遺構と位置づけた。

第7層から第10層は、淡灰褐色砂礫層と淡黄褐色砂礫層の混層、灰褐色砂質土層、灰褐色砂礫層を形成し、第9層淡黄褐色砂礫層は貝を多く含む包含層であり、ここまでの層を近世の遺構と位置づけた。

次に、北調査区東側では、建物跡【石列】を検出した。この建物は東西方向の石列1および南北方向の石列4で構成され、絵図等からみて18世紀前半から中葉にかけて成立したと推定される、北側に面を持つ建物2棟分と考えられ、これら石列は地割石と見られる。石列2は2つに分かれているが、試掘トレンチにより石を抜き取られ本来は1つのものである。石列1に並行して北側に配列されており、前述の建物（本宅）が幕末期に拡張されたものと推定される。石列3は石列2と同様に試掘トレンチで石が抜かれ3つに分かれており、石列5とともに北側と東側部分の拡張と認められ、おそらく明治期にも拡張をしたものと推定される。

また、石列2の東北隅には、0.4×0.4mの浸透枡と考えられる石組が確認された。これに続く幅0.2mの排水溝が東西方向5.7mにわたって認められ、底には0.2m程度の花崗岩が敷かれていた。

その他、同調査区では、地表下約1.1mのところで、調査区北側に広がる貝の堆積層を確認した。この貝層は、第1層から第9層までの9層に区分した。第1層は淡茶褐色砂層と黄褐色砂層の混層、第2層は灰褐色砂質土層、第3層は灰褐色砂質土層に貝層が混じっており、第4層は、貝層を上下サンドイッチ状に暗褐色粘質土が挟み、第5層が貝層となっている。この貝層は、0.15mから0.3mの厚さを有しており、貝類の分析を宮島水族館に依頼したところ、アサリが99%以上を占め、その他の貝類（アカニシ、テングニシ、イボニシ、サザエ、ハマグリなど）及び魚類（スズキ、マダイ、クロダイ）の背びれのトゲ及び頭部の骨が確認された。この貝層から検出された他の遺物から、この層の年代は16世紀後半から17世紀前半と推定される。また、第5層に引き続き、第6層は黄褐色砂礫層、第7層は淡黄褐色砂礫層、第8層は黄灰色砂礫層、最下層となる第9層は黄褐色砂礫層となっている。

また、この貝層下から東西方向に伸びる石垣を検出した。性格については、護岸としての機能を有

していたと推定される。周辺で同じく検出された丸太材 2 本について、放射性炭素年代測定を行い、1530 年から 1560 年の測定値を得ており、周辺遺物の状況を考慮すると石垣の築成年代は 14 世紀から 15 世紀代に位置づけることができる。また、中世の土坑として SK13～21 が検出された。この他、同調査区では、土坑の SK 5・7・9・12 が検出され、18 世紀代に比定される。なお SK 7・9 の土坑内からは大量の貝殻が出土した。瓦溜 1・2 が調査区北側で検出された。時期は 19 世紀末から 20 世紀前半と考えられる。

石組 1・4・5～8・10～12 が、調査区内から検出された。いずれも浸透枘と考えられる。構築時期は江戸時代後半から明治初頭頃に位置づけられる。

埋甕 1～8 は、江戸時代後半から幕末頃と考えられる。



第 6 図 建物跡【石列 2～5】検出状況（東から）

IV 検出遺構

1. 近世～近代の遺構

SK 1 (第7・13図)

調査区の南西にある。平面の形状は五角形を呈している。土坑の長軸は1.6m、短軸は1.5m、深さは西が0.1m、南が0.16mで、掘形は浅鉢状である。土坑内からは18世紀中頃の唐津系三島手鉢、波佐見染付碗が見られるので、構築時期は18世紀初めの可能性がある。他に堺播鉢、灯明皿、羽釜などの江戸時代後期の遺物が出土している。

SK 2～5 (第13図)

調査区の西部にある。いずれも小土坑で出土遺物もない。

SK 7 (第13図)

調査区南側にある土坑で、深さは0.52mを測る。遺構内には大量の貝殻が廃棄されている。出土遺物としては、備前摺鉢、備前鉢(16世紀)、伊万里染付片(18世紀)などがある。掘削された時期は18世紀代と考えられる。

SK 9 (第13図)

南壁際にある土坑で、深さは0.4mを測る。SK 7と同様に大量の貝殻が存在した。伊万里染付碗、伊万里染付瓶、伊万里香炉、波佐見染付皿など18世紀代の遺物が出土している。時期は18世紀代と考えられる。

SK10 (第13図)

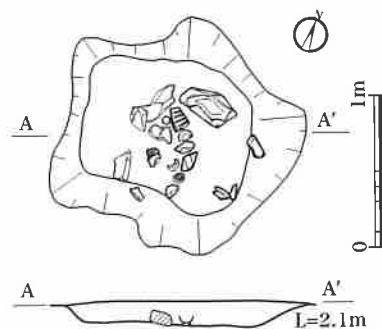
調査区の西端にある。深さは0.05mを測る。土坑内からは大量の貝殻と18世紀代と考えられる波佐見染付碗、丸瓦、土師質鍋などの遺物が出土している。

SK12 (第8・13図)

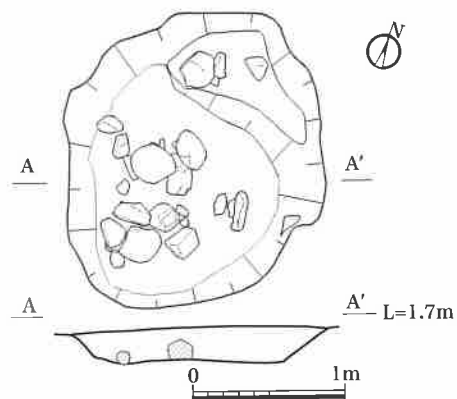
石組12の東にある。平面の形状は楕円に近い形をしている。土坑の長軸は2.1m、短軸は1.7m、深さは西と南部分が0.11m、東が0.23m、北が0.13mである。掘形は浅鉢状である。遺構内からは17世紀代の唐津碗がみられるが、伊万里青磁盤、伊万里染付徳利、唐津系三島手鉢など18世紀代中頃のものが多く、掘られた時期としては18世紀代前半の可能性がある。

土坑【石組9】(第9・13図)

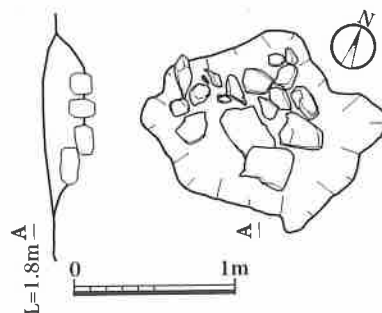
当初は石組9として調査したが、土坑であるので、



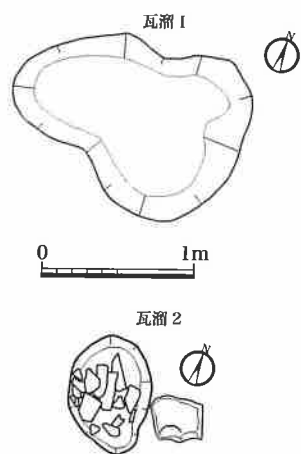
第7図 SK1 実測図



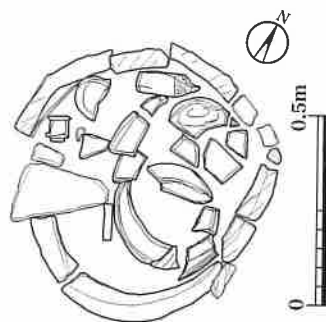
第8図 SK12 実測図



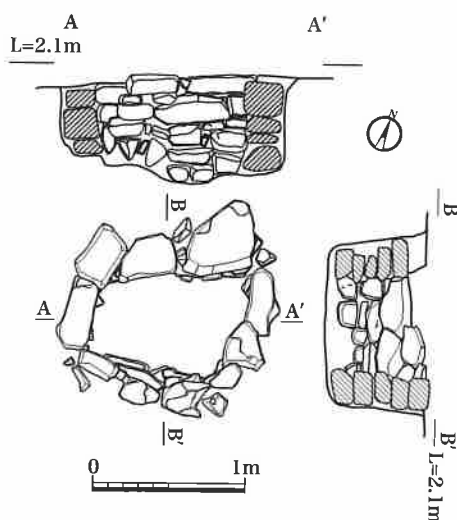
第9図 土坑【石組9】実測図



第10図 瓦溜1・2実測図



第11図 SE 1実測図



第12図 石組1実測図

ここで述べる。調査区の南で検出した。石組1～3、5～7、10、11、14と違い、不定形な土坑に石が置かれた形状である。長軸は1.5m、短軸は1.26m、深さは中央部で0.19m、掘形は浅鉢状である。埋土からは陶磁器小片が出土している。

瓦溜1(第10・13図)

石組4の南にある。土坑の長軸は1.6m、短軸は1.1m、深さは南部分が0.05m、北部分が0.14mで、掘形は浅鉢状である。土坑内には平瓦・丸瓦がぎっしり詰まった状態で検出された。その他の遺物としては近世の唐津碗、伊万里青磁染付片、伊万里染付片、明石播鉢、焙烙、土師器などが見られる。出土遺物の大半は近代瓦で遺構の性格は廃棄土坑である。

瓦溜2(第10・13図)

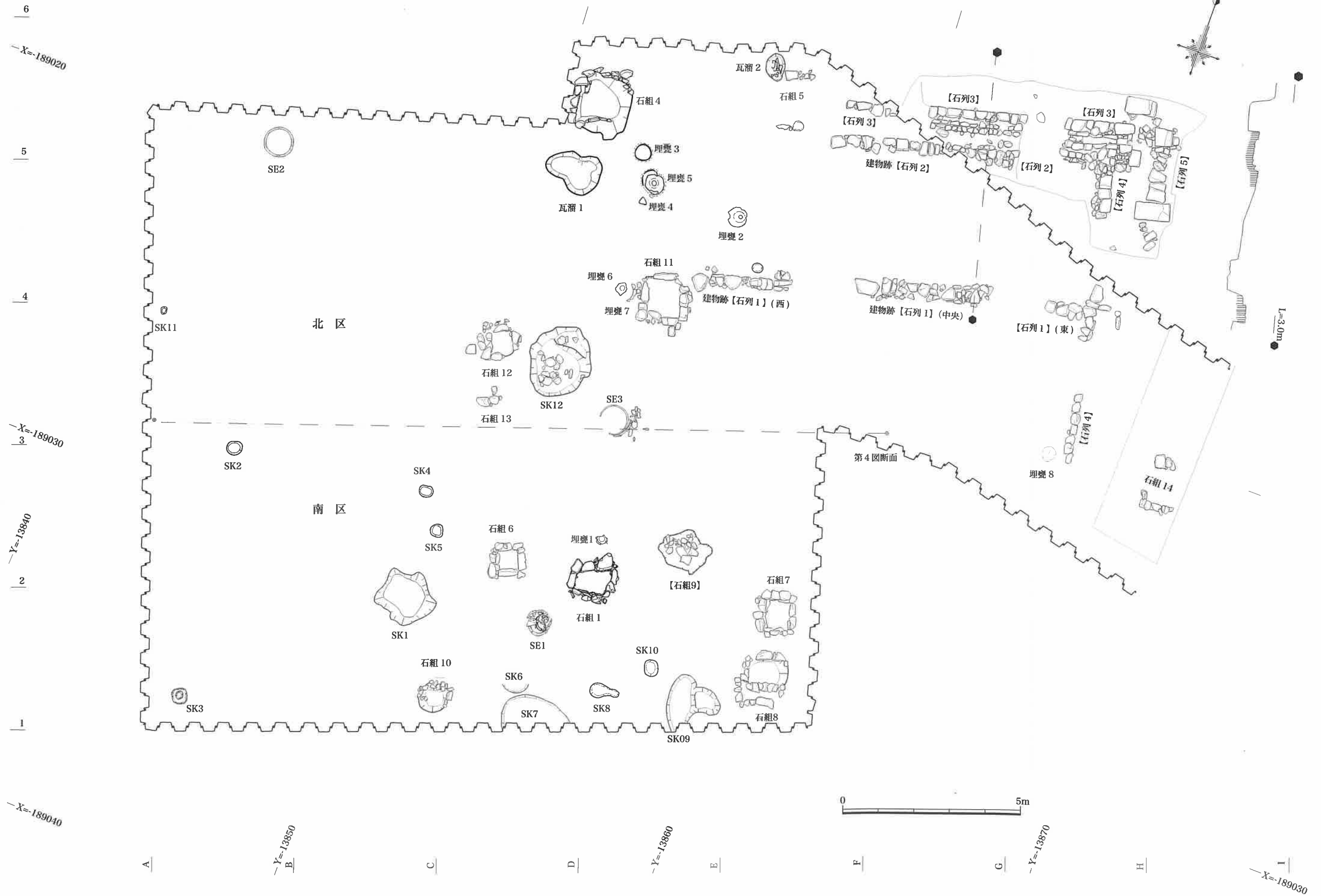
石組5の北辺の西に隣接している。平面の形状は不正な楕円形で、土坑の長軸は0.78m、短軸は0.54m、深さは0.2m、掘形は浅鉢状である。遺構内に平瓦・丸瓦がぎっしり詰まった状態で検出された。瓦以外に行平、伊万里染付碗、九州産京焼風陶器皿、灯明皿、土師器などが見られる。出土遺物の大半は近代瓦で遺構の性格は廃棄土坑である。瓦溜1と同時期と考えられる。

SE 1(第11・13図、図版6)

調査区南部にある井戸跡で、直径0.7mの三和土で造られた井戸である。枠の厚さは幅0.06mで、深さ1.0mまで掘下げてたが、湧水のため底面までは確認できなかった。構築時期は不明であるが、昭和時代の陶磁器が大量に出土している。

石組1(第12・13図)

使用石材は、加工しない川原石と一部を平坦に整形した川原石で、四角形に組上げられている。南辺は長さ1.1m、北辺が1.2mで長さは少し違うだけであるが、西辺は0.48m、東辺は0.96mと差が大きく、平面は不正な四角形で、東・西辺の方位はほぼ座標北を向く。積石は3段から5段で掘形は組石の外縁より僅かに広がる程度で深さは0.7mである。遺構内からは、古銭(寛永通宝)、伊万里染付碗、



第13図 近世～近代遺構全図

信楽茶碗、唐津系三島手大鉢など 18 世紀中頃のものが多く見られ、構築時期はこの前後の可能性がある。

石組 4 (第 13・14 図)

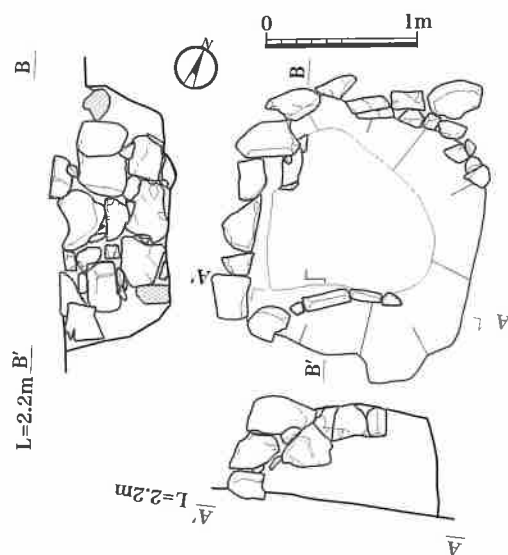
調査区北辺のほぼ中央にあり、1 辺の長さほぼ 1.41m の四角形で、北辺は遺構面に一段だけ石を並べ、東辺の組石はない。西辺の石組は 3 段である。大きな石 (加工しない川原石と一部を平坦に整形した川原石) を 3 段に組上げ、隙間に小さな石を入れる。南辺は南西隅では 3 段の組石があるが、東に向かうとまばらになり、南東隅では組石がない。掘形は組石の外縁のラインとほぼ同じで、深さは 0.7 m、方位は N-12° -E である。遺構内から、伊万里染付小片、波佐見染付小片、平瓦、唐津系三島手大鉢、土師質甕、砥石など 18・19 世紀の遺物が出土したことから、構築時期は 18 世紀代の可能性がある。

石組 5 (第 13 図)

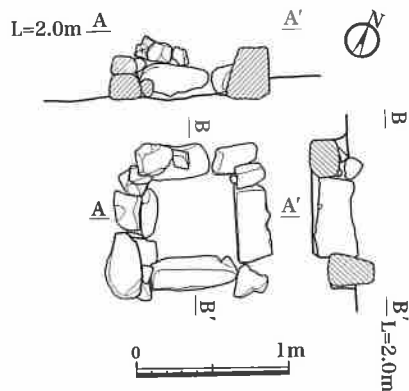
調査区の北隅で南・北辺 2 列のみ検出された。南北辺の方位は N-21° -W を指す。東・西辺は検出されておらず、石列の可能性もある。遺構周辺では、伊万里染付碗・同蓋、唐津碗、瀬戸小碗、瓦質鍋、風炉など 18・19 世紀の遺物が出土した。

石組 6 (第 13・15 図、図版 5)

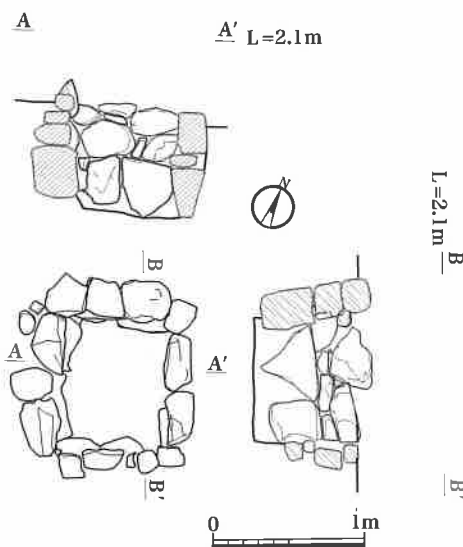
調査区の南側にある。4 辺は長さがほぼ 1.0m の四角形で、東南辺は一边を平坦に整形した石を 1 段置き、北西は自然石 2 段を積重ねている。掘形は組石の外縁のラインとほぼ同じで、深さは 0.24 m あり、方位は N-26° -W である。土瓶・伊万里染付な



第 14 図 石組 4 実測図



第 15 図 石組 6 実測図



第 16 図 石組 7 実測図

ど 18・19 世紀の遺物がある。設置は明治に入ってからと思われる。

石組 7 (第 13・16 図、図版 5・6)

調査区の南側にある。4 辺は長さほぼ 1.2m の四角形で、加工しない川原石と一部を平坦にした川原石を組上げている。北東辺とも組石は 3 段である。掘形は組石の外縁のラインとほぼ同じで、深さは 0.7 m、石組の中ではもっとも深い。方位は N-12°-W である。埋土には備前達磨徳利、伊万里染付猪口、土師器、行平、焙烙、平瓦など 19 世紀代の遺物が多い。

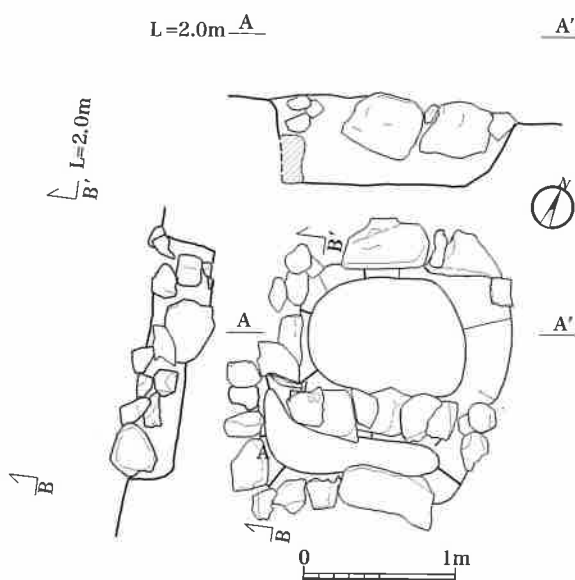
石組 8 (第 13・17 図、図版 5)

石組 7 の南に隣接しており、調査区の南端にある。南辺が二重になり、西辺は折れ曲がり、東辺に組石はない。北辺の長さは 1.2m、西辺の長さは 1.44m、南辺の内側・外側は 1.1m で、加工し

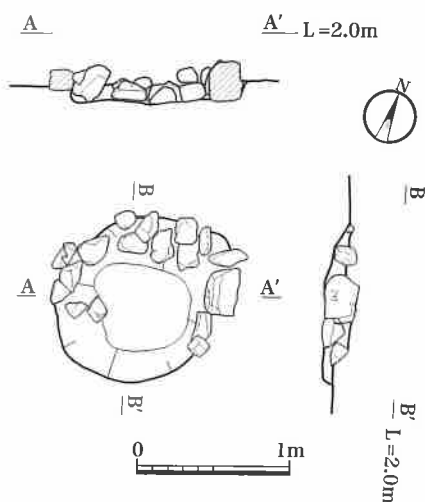
ない川原石と一部を平坦に整形した川原石を組上げている。西辺の組石は 2 段、その他は 1 段で、掘形は組石の外縁のラインとほぼ同じ、深さは北辺付近が 0.42 m と深く、南辺付近は 0.24m と浅い。方位は N-27°-W である。埋土には備前小型壺、伊万里染付皿、波佐見染付碗・同皿、羽釜、土師器、行平、焙烙、平瓦、明石播鉢など 18・19 世紀の遺物が見られる。

石組 10 (第 13・18 図)

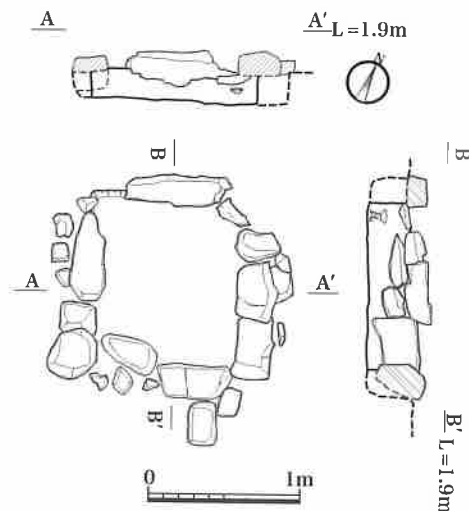
調査区の南側にある。北辺の組石は残っているが東西辺の組石は南側が途切れ、南辺の組石はない。長さは南北辺が 0.66m、東西辺が 0.5m である。各辺とも組石は 1 段、掘形は組石の外縁のラインとほぼ同じで、深さは 0.1 ~ 0.06 m、方位は N-21°-W である。掘形が浅いことから上部が削平され石組の最下段の



第 17 図 石組 8 実測図



第 18 図 石組 10 実測図



第 19 図 石組 11 実測図

みが残ったものと思われる。埋土からは陶磁器小片が出土している。

石組 11(第 13・19 図)

調査区の南側にある。4 辺は長さはほぼ 1.4m の四角形で、加工しない川原石と一部を平坦に整形した川原石を組上げている。南北西辺の組石は 1 段で、東辺の中央部は 2 段である。掘形は組石の外縁のラインとほぼ同じで、深さは南北西辺付近は 0.2 m であるが、東辺付近は 0.39m と深い、方位は N-17° -W である。埋土からは平瓦、陶磁器小片が出土している。

石組 12(第 13・20 図)

調査区の中央部西側にある。4 辺は長さほぼ 0.9m の四角形で、丸みを帯びた川原石を 1 段組上げているが、南辺の東隅と東辺の南隅の組石は欠けている。深さは北東辺付近は 0.1 m であるが、西辺付近は 0.19m と深い、方位は N-22° -W である。埋土からは瓦質甕、備前徳利、唐津系刷毛目碗、備前甕、伊万里染付皿、唐津系三島手大鉢など、18 世紀中頃の遺物が出土したことから構築時期は 18 世紀中頃の可能性がある。

石組 14(第 13・21 図)

調査区の東端にトレンチを入れ 0.3m 掘下げたところ石組 14 が確認された。同遺構の南北辺のみ組石が残り、東西辺が欠けているため規模は不明である。北辺では川原石を 2 段、南辺では 3 段組上げている。掘形の深さは不明。南辺の方位は E- 8° -S である。埋土からは中国製青花片・唐津碗・鉢・甕、高取焼鉢など 17 世紀代の遺物が見られるが、構築時期は近代である。

埋甕 1(第 13・22 図)

石組 1 の北側に据えられている。陶器甕の底部から体部下半が正位置で埋められている。隣接して堺搦鉢が据えられた状態で検出された。

埋甕 2(第 13・22 図、図版 7)

石列 1(西)の北に甕の体部と底部が正位置で 0.3m 埋められた状態で検出された。埋土からは平瓦が出土した。

埋甕 3～5(第 13・22 図、図版 7)

瓦溜 1 の東側に隣接している。何れも土師質である。

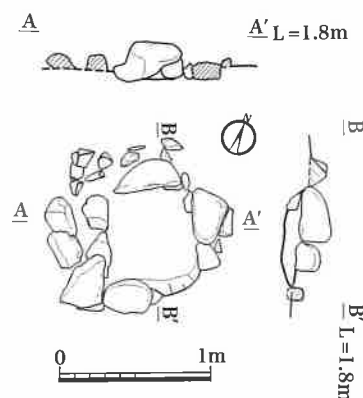
埋甕 3 は逆位で口縁を下にした状態で据えられている。底部は欠損し、口縁部が 0.2 m のみ残っている。

埋甕 4 は埋甕 5 より後に同じ場所に据えられたため、埋甕 5 を破壊した状態で残っている。口縁から底部までほぼ残っており、高さは 0.42m である。

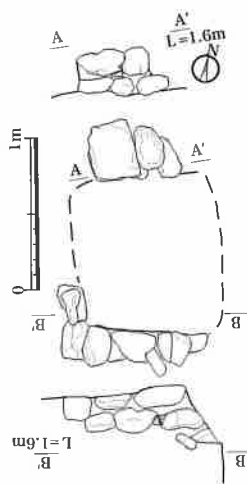
埋甕 5 の口縁部は欠損している。体底部 0.3m が残っている。

埋甕 6・7(第 13・22 図)

石組 11 の西に隣接している。何れも土師質で埋甕 7 の



第 20 図 石組 12 実測図



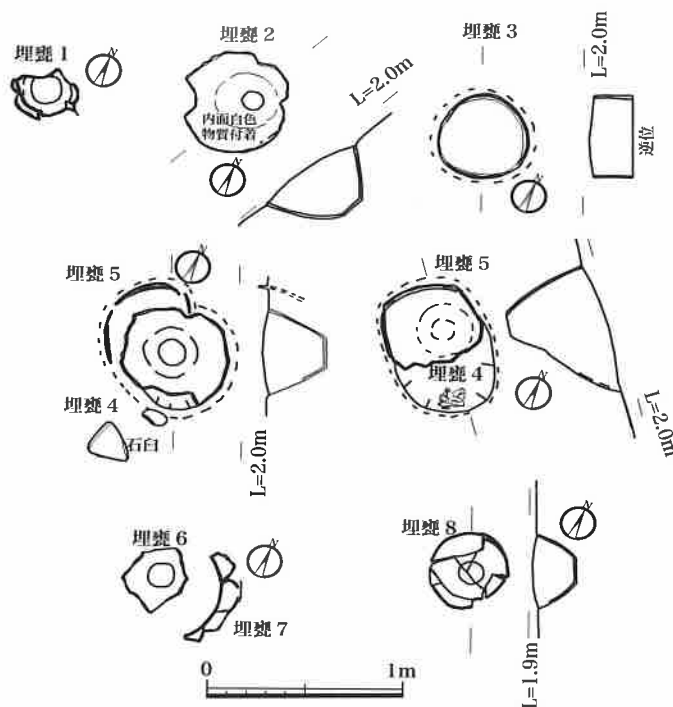
第 21 図 石組 14 実測図

内側に埋甕6の底部が入れられた状態で検出されたことから、埋甕7の設置後に埋甕6が据えられた可能性がある。両方とも胴部以上は削平され底部のみが残っているだけである。

埋甕8(第13・22図)

土師質で、石列4の西側で検出された。口縁部が壊れて甕内部に落込んだ状態で検出された。南・北・西辺付近は0.2mと浅いが、東辺付近は0.39mと深い、方位はN-17°-Wである。遺構埋土からは平瓦、陶磁器の小片が出土している。

これまでの遺構は近代が中心であったが、近世の遺構も数基検出されているので、ここで述べておく。



第22図 埋甕1～8実測図

建物跡【石列1】(第13・23図、図版8～10)

石列1は調査区の中心部を東西に貫く石列であるが、3ブロックに分かれている。西と中は2.45m、中と東は試掘トレンチにより2.04mあるので、西・中・東の3箇所に分けて記述することとする。石列1(東)は南北に伸びる石列4と直角に交わっている。石列1(西)の方位と(中)の方位を比較すると、石列1(西)が南に4°傾いている。

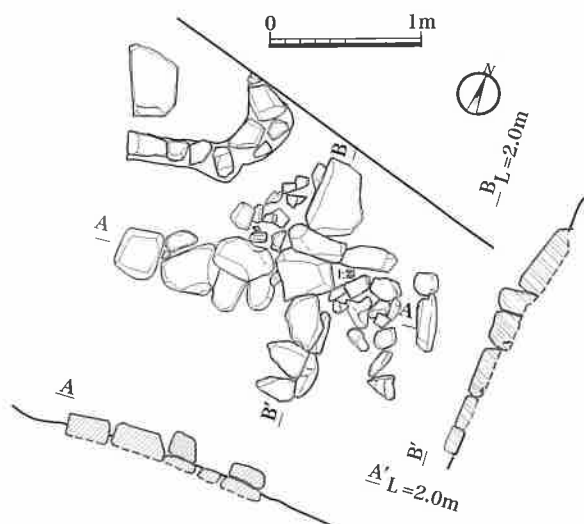
石列1(西)は0.4m程度の石3個と小ぶりの石からなる。積石は1段で全長は2.84m、西端は石組11に当たり止まる。上段西端石のレベルは1.895m、東端石も1.925mとほぼ水平である。方位はS-63°-Wである。

石列1(中)は上面の平坦な石を並べている。積石は2段で高さは0.48m、隙間には土を詰めている。西端のみ2段目が露出している。上段西端石のレベルは2.175m、東端石も2.175mと水平である。方位はS-67°-Wである。石列1(東)は一辺0.28mと0.38mの石が2点、大きさ不明の石4点からなる。積石は1段で石列4との接続部のみ2段で全長は1.06mである。西端石のレベルは2.14m、東端石は2.08mとやや東が高い。

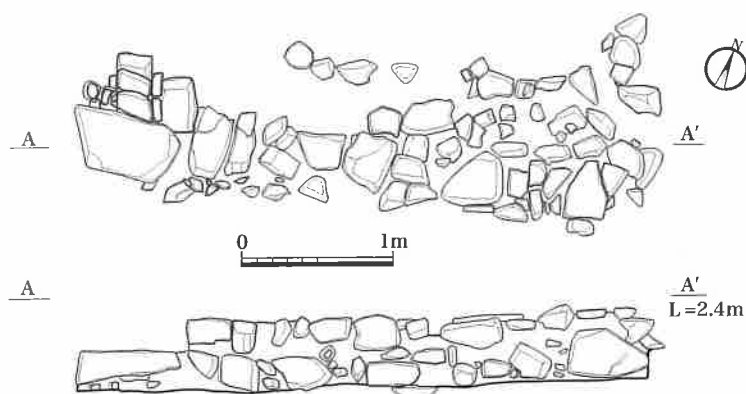
建物跡【石列2】(第13・23図、図版8～10)

調査区内に10石、拡張区内には15石が残る。拡張区内の一部は試掘トレンチにより分断されている。上面の平たい石を並べており、積石は2段で高さは0.28～0.3mである。方位はS-68°-Wである。

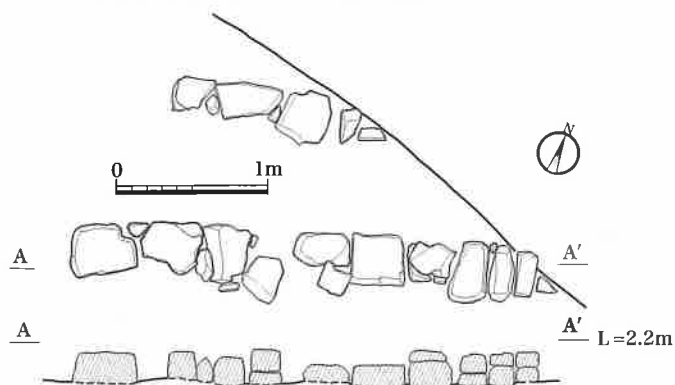
拡張区内では石列の北側に排水溝がある。排水溝は護岸石と底石で補強される。幅は0.4mで、東端に湛水桝がある。ここから18世紀中頃の伊万里青磁染付碗が出土している。排水溝の東端では溝



建物跡【石列1】(東)平面図・断面図



建物跡【石列1】(中央)平面図・断面図



建物跡【石列2・3】平面図・断面図

第23図 建物跡【石列1～3】実測図

中央に土管が据えられていることから、改修が行われたことがわかる。

同一遺構面で江戸中期～幕末期の伊万里染付、九州産陶器が出土している。構築時期は、幕末期と考えられる。

建物跡【石列3】(第13・23図、図版8～10)

調査区内に3石、拡張区内には10石で長さ3.08m、さらにこの東側に石列が2.1m続いている。上段には平たい石を並べており、積石は1段と2段の部分がある。高さは0.2mから0.24mである。方位はS-68°-Wである。

建物跡【石列4】(第13図、図版8・9)

調査区内に13石残っている。試掘トレンチにより1.4m切目がある。切目をはさんで、北側は石列1(東)との接続部で長さは1.6m、6石からなる。南側は1.98m、7石からなる。積石は1段で、高さは0.16～0.24mである。上面には平坦な石を並べている。方位はN-13°-Eである。

2. 中世の遺構

石垣・丸太材 (第 24・25 図、巻頭図版・図版 11 ~ 13)

石垣は、中世遺構面を確認するために設けたトレンチの 3 箇所 (西部・中央部・東部) で、全長 32m 分が検出された。

西部では 8.35m 分が確認されている。幅は 1.5 m で一辺 0.35 m 以下の石を敷き詰め、その上に一辺 1.0m ~ 0.5 m の大石を並べる。西端 2m 分は大石が抜き取られている。西端の大石上端の標高は 0.82m、同東端は 0.90 m で、方位は S-55°-W である。遺構周辺で 15 世紀代の中国製白磁皿 B 群の口縁部が出土している。

丸太材は 2 本検出されている。北側の材は、長さ 5.85 m、直径 0.25m、南側のものは長さ 3.25m、直径 0.3 m である。方位は石垣と平行ではないが、北側は大型石列とほぼ同じ、南側は南に 4°振れている。両者の間隔は東端部分で 0.3 m、南側の西端部分で 0.5m である。

中央部では一辺 0.35 m 以下の石を敷き詰めた幅 1.0 m 部分とその北側にある大石 1 個が検出された。周辺から中国製白磁皿 B 群の底部が出土している。

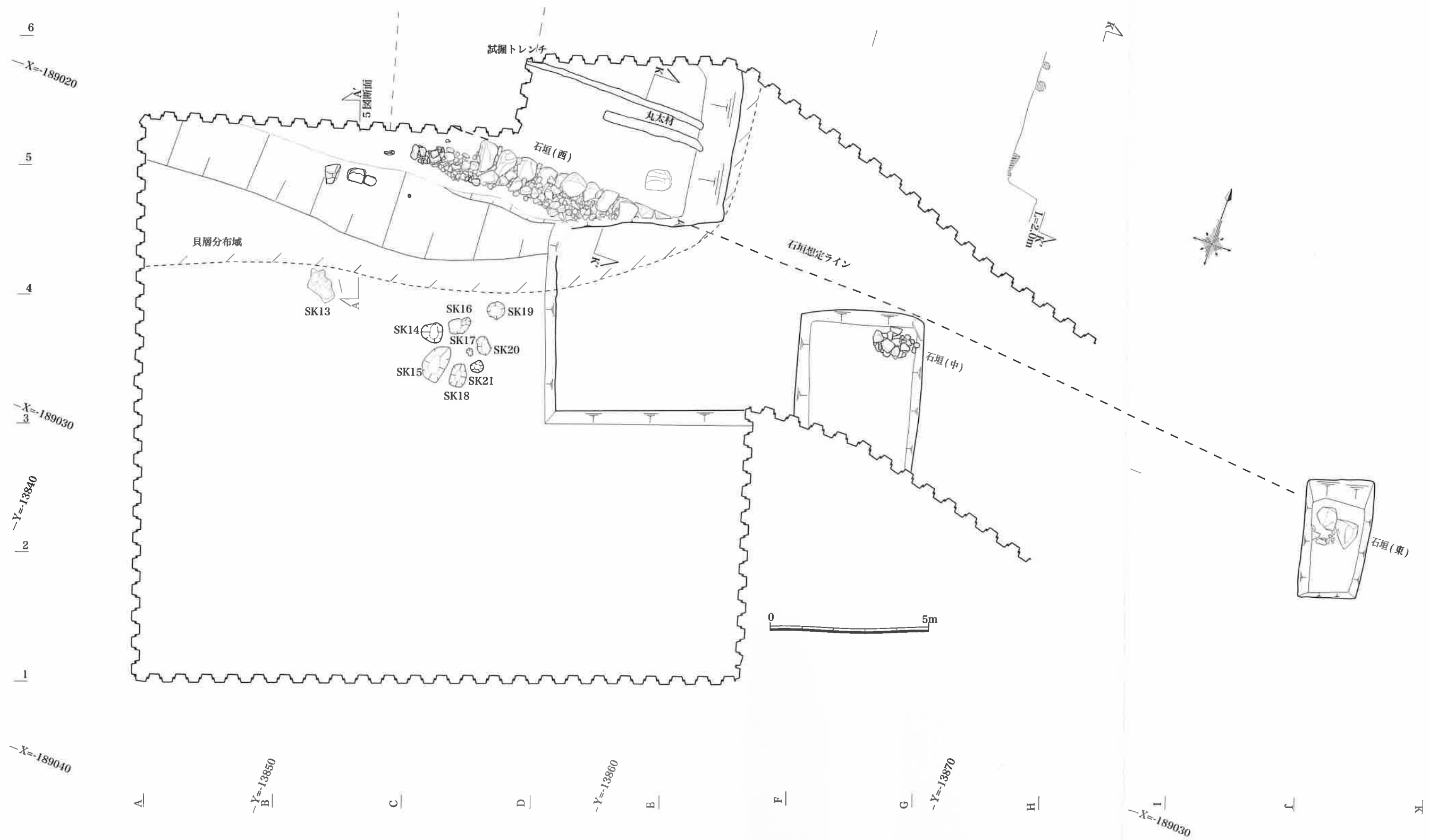
東部では大石が 2 個検出されたが、一辺 0.35 m 以下の敷石は疎らにしか残っていない。

SK13 (第 25・26 図)

調査区の西部にある土坑で、長軸は 3.2m、短軸は 1.1m である。底は 2 段になっており、最深部の深さは 0.44m である。上部で鉄滓が検出された。



第 24 図 石垣と丸太材 (北から)



第 25 図 中世遺構全体図

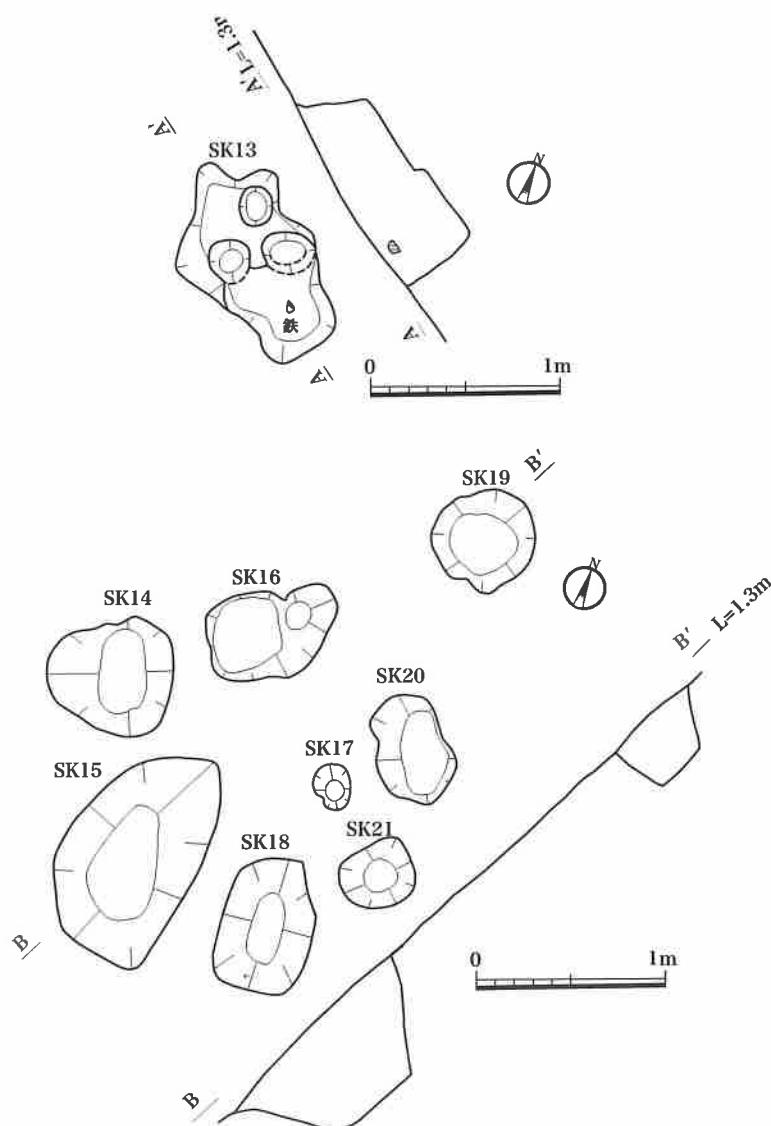
SK14～21(第25・26図、図版13)

調査区の西端に8基の土坑が検出された。土坑は中央の空白部を囲むように位置する。各々の規模はSK14が、長軸0.66m、短軸0.646m、深さ0.33m、SK15は、長軸1.2m、短軸0.7m、深さ0.31m、SK16は、長軸0.73m、短軸0.48m、深さ0.35m、SK17は、長軸0.24m、短軸0.19m、深さ0.25m、SK18は、長軸0.72m、短軸0.48m、深さ0.34m、SK19は、直径0.56mの不正な円形、深さ0.35m、SK20は、長軸0.6m、短軸0.42m、深さ0.29m、SK21は、長軸0.4m、短軸0.34m、深さ0.17mで、掘形は何れも深皿状である。

SK16から土師器片、SK18から平瓦、磁器片、SK20からは羽釜片、SK22からは平瓦、内耳焙烙、瓦質甕、土師器、磁器片が出土している。何れも16世紀代のものと思われる。掘削時期も16世紀代と思われる。

註

- 1) 小野正敏「14～16世紀の染付碗・皿の分類」『貿易陶磁研究』No.2 1982年



第26図 SK13・14～21実測図

V 出土遺物

1. 土器・陶磁器 (第 27 ~ 31 図、図版 14 ~ 16)

出土の供膳具や煮焚具には各時代のものがある。量的には、近世から近代のものが中心となるが、中世に関係するものもある。中国製の鎬蓮弁文青磁碗や、白磁碗・皿・染付など、また、瀬戸・美濃窯の製品などもあり、鎌倉から室町時代に属する。

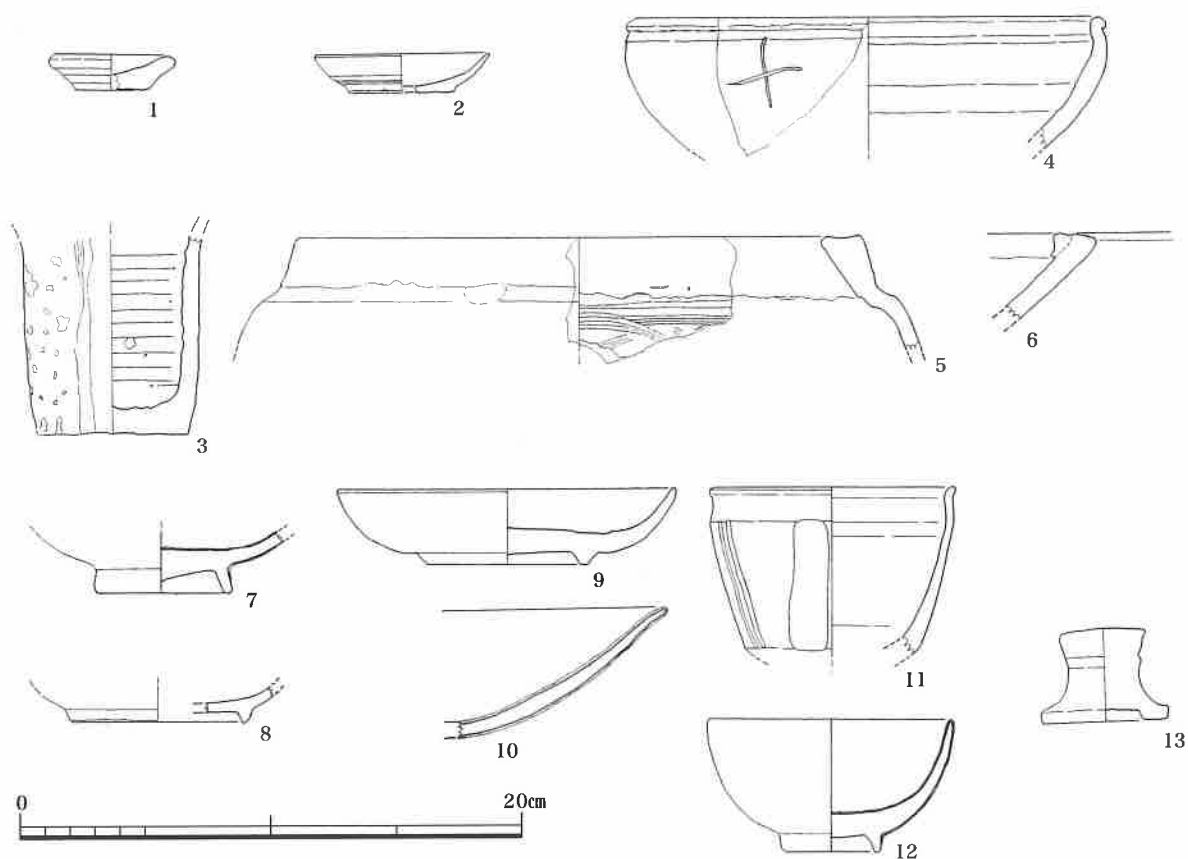
発掘調査は大きく 2 層に分けて行われたが、下層の土器・陶磁器類は少なく、良好な一括遺物も存在しないので、ここでは器種・器形に分けて、試掘調査時の遺物から順に述べる。

試掘調査の土器・陶磁器 (1 ~ 13)

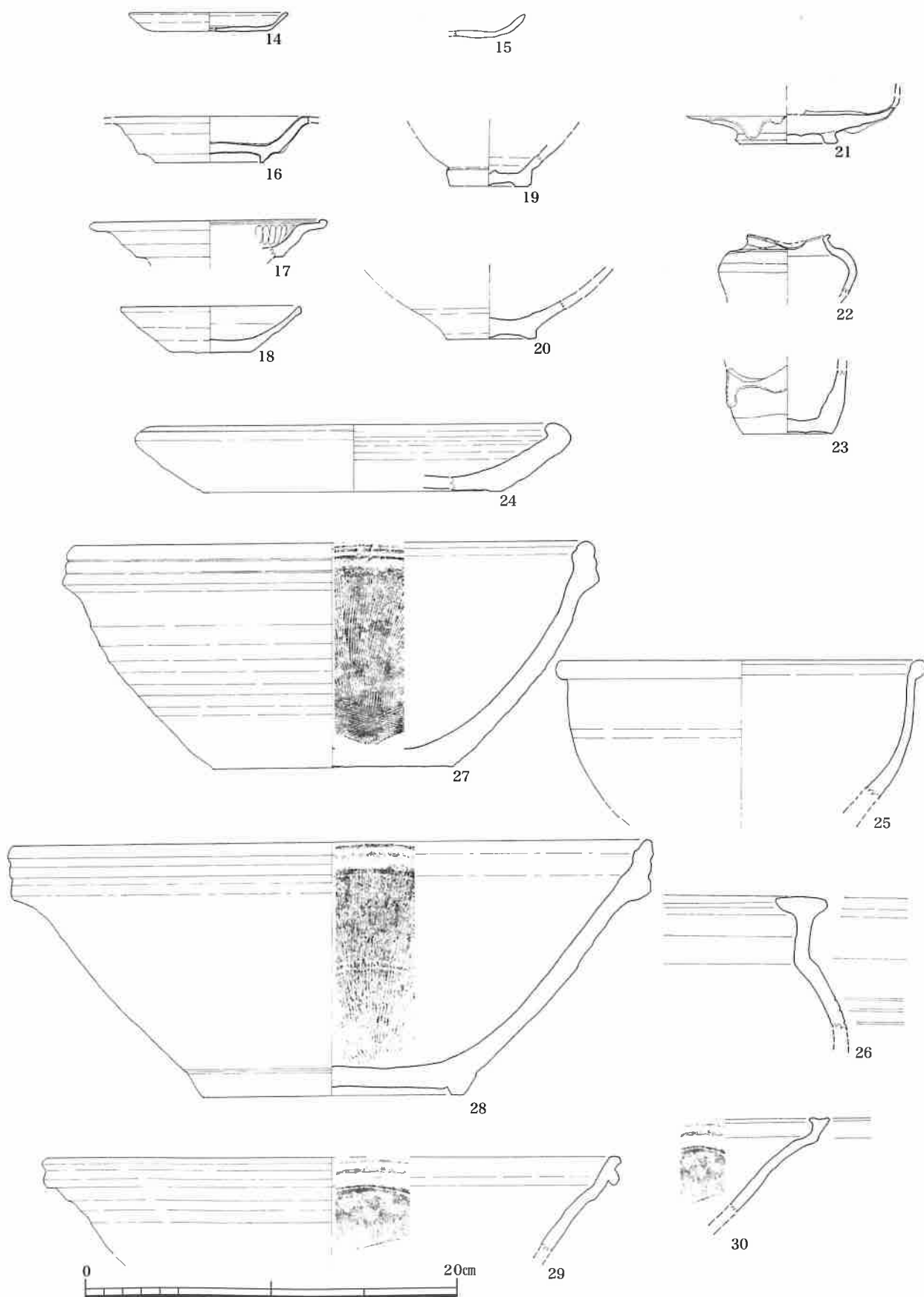
1・2 は土師器皿で、1 は口径が 4.6 cm と小さい。2 は底部にヘラ切り痕が残る。底部から直線的に開く器形で、共に近世の遺物である。

3 は備前焼の筒型花入れで、外面には自然釉が掛かる。4 は備前焼鉢の口縁部で、内彎して立ち上がり、端部は少し外側に折り曲げる。外面に「+」字のヘラ記号がある。

5 は瓦質の甕で、頸部から口縁部へは内傾して立ち上がり、端部は肥厚し、平坦面をもつ。内面の頸部には刷毛目調整が残る。6 は瓦質焼成の搗鉢。口縁端部は内面側で肥厚する。5 本一単位のスリ目が引かれる。



第 27 図 土器・陶磁器実測図 1 (1:3)



第28図 土器・陶磁器実測図2(1:3)

7は中国製の青磁碗で、高台は高く「ハ」字状に開き、体部は内彎して伸びる。黄緑色の青磁釉が掛かるが、畳付け部は露体である。8は中国製の白磁皿で、断面三角形の低い高台が付く。10は漳州窯の染付盤である。

9は伊万里焼の染付皿。内底面を蛇ノ目状に釉剥ぎし、草花文を描く。口径は13.5 cm、器高は3.0 cmある。11は初期の伊万里焼染付碗で、体部外面に「香房」の銘がある。12は波佐見焼の染付碗。

13は小型の器物の高台部分で、低い円柱状の高台部から皿状の体部が伸びる。外面は薄い白磁釉で施釉する。

発掘調査の土器・陶磁器 (14～56)

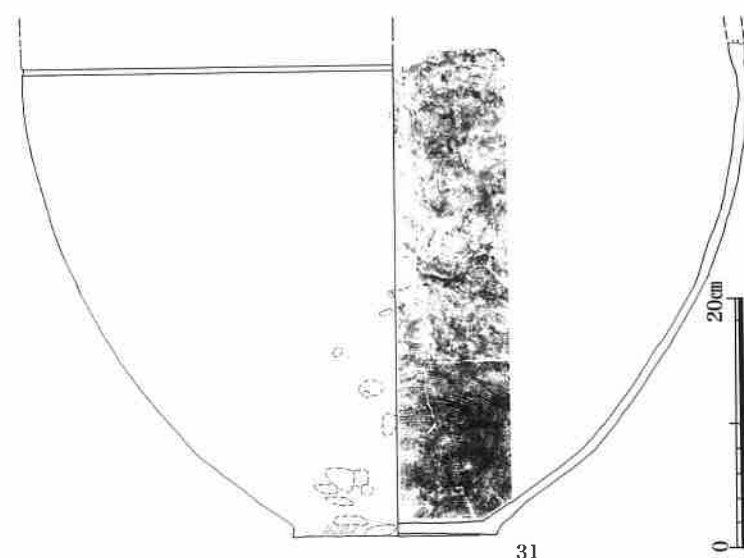
14・15は土師器皿で、底部外面に糸切り痕があり、内面はナデ調整する。15は外面に煤が付着する。

16は瀬戸・美濃窯の皿。中国青磁の稜花皿を模倣したもので、端部は外反する。高台外面以外に

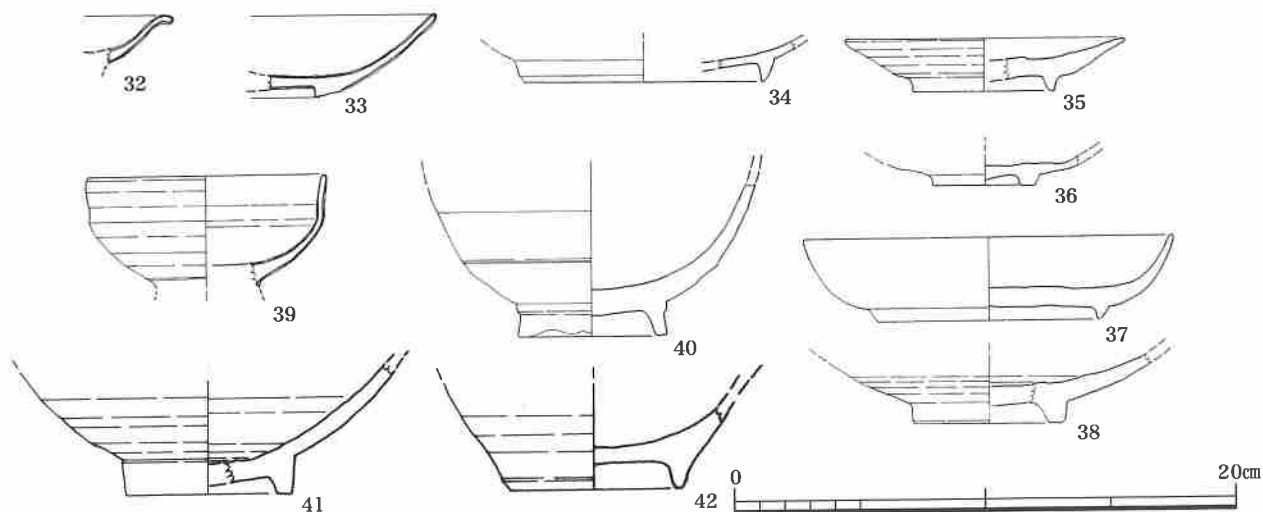
灰釉が施される。17も瀬戸・美濃窯の皿。内面に菊花文がある。

18は陶器皿で、糸切りの底部から直線的に端部に至る器形。備前の製品である。

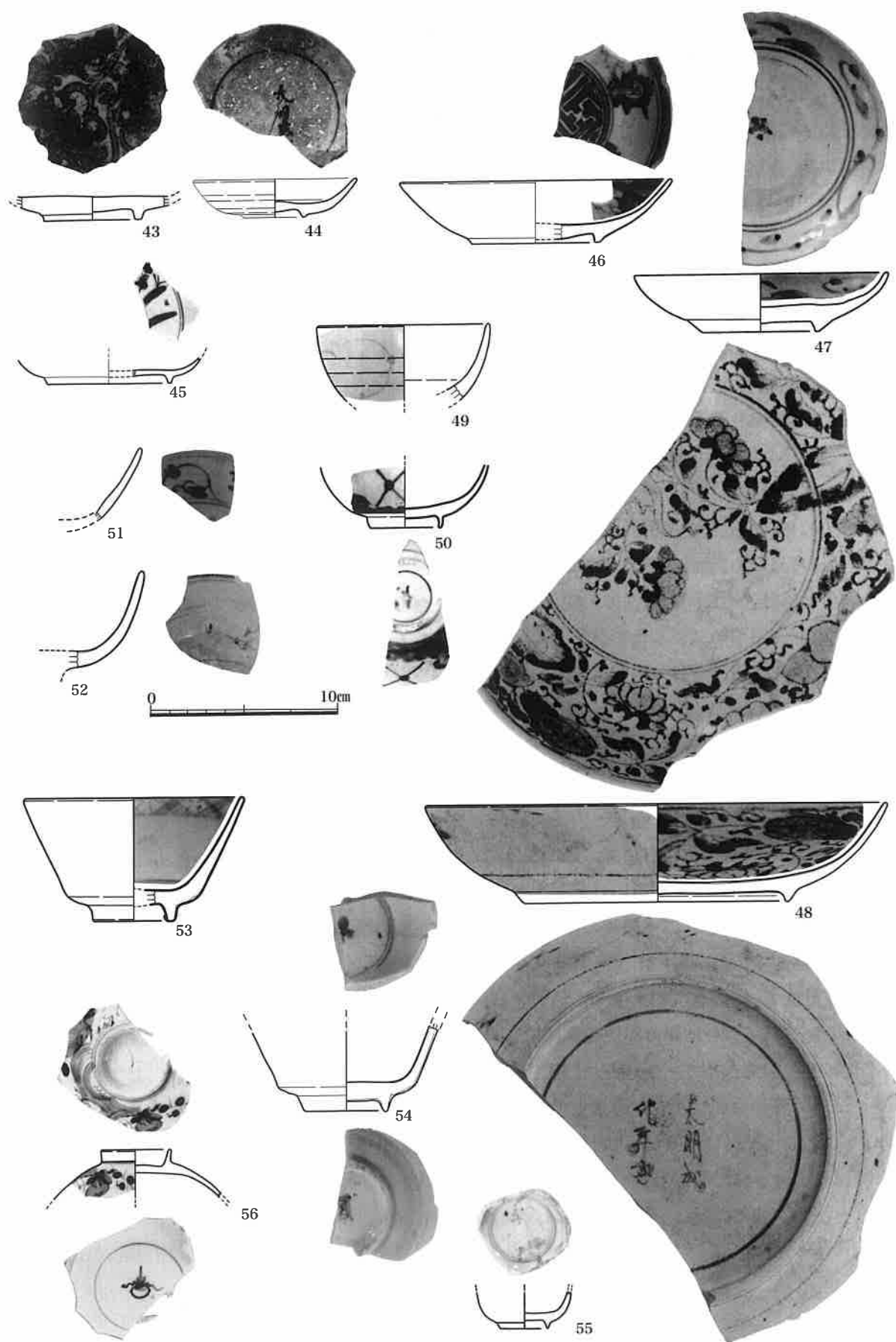
19は幅が広く低い高台が付き、糸切りが残る。体部には淡緑灰色の釉が施される。肥前陶器である。20も唐津焼の碗で、底部から緩やかに立ち上がる。21は高取焼の沓茶碗。高台は方形で低く、割高台である。体部の下位から屈曲し、ほぼスト



第29図 土器・陶磁器実測図3 (1:6)



第30図 土器・陶磁器実測図4 (1:3)



第31図 土器・陶磁器実測図5(1:3)

レートに立ち上がる器形。高台脇はへう削り調整する。内面には厚い灰釉が掛かる。

22・23は陶器の茶入。共に備前焼である。22は器壁が薄く、きめの細かい胎土で作られる。割れ目を漆継ぎしている。

24は大型の備前焼盤。口径は21.3 cm、器高は3.6 cmと低い、底部から体部は斜め上方に伸びるが、端部は内側に巻き込む。

25は鉄釉の陶器鉢で、口径が19.3 cm前後、器高は15 cm前後になる。26は陶器甕で、口縁端部が内外面に大きく肥厚する。外面の頸部下には沈線が引かれる。

27～30は播鉢で、備前焼28とそれを模倣した泉州堺の製品27がある。29・30は器壁が薄手の播鉢で、九州系の製品とされている。29は外面の口縁直下に方形の凸帯が廻る。30は端部直下で上方に屈曲し、端部は平坦である。

31は埋甕4の遺構から出土した甕で、正位置で埋められていた。体部中位から底部が残り、底径は16.3 cm、体部の最大径は55.2 cm程ある。器壁は薄く、内面には細かな同心円のタタキ目が残る。焼成がやや甘く、黄褐色をする。

32は中国製の白磁皿で、口縁端部が外反するB群に属する。33は中国の青磁皿で、高台は碁笥底になる。皿付け部は露体であるが、その他には青緑色の釉が厚く掛かる。34は中国製白磁皿の底部破片、断面三日月状の高台が付く。35は口径は11.2 cm、器高が2.1 cmの白磁小皿。見込みは重ね焼きのために、蛇ノ目状に釉剥ぎしている。暗灰色に発色する白磁釉が掛かる。中国の製品である。36は朝鮮李朝の皿。方形の低い高台が付く。見込み部と高台に砂目痕がある。

37は波佐見焼の皿。三角形の低い高台部から体部が内彎して立ち上がる。コンニャク版で施文する。38は台形のしっかりした高台が付く青磁釉の皿。見込み部は蛇ノ目状に釉剥ぎする。瀬戸・美濃系の製品である。

39は底部から内彎し、体部の中位からストレートに立ち上がる白磁碗である。40は三島手の唐津碗で、高い高台が「ハ」字状に開き、内面に施文する。胎土は粘質できめが細かく、暗茶褐色に発色する。41は台形の高台が付く白磁碗。42は底部の破片で、器形は壺である。

43は中国製の染付皿で、見込みには葡萄唐草文が描かれる。44は伊万里焼の皿で、見込み部に「大明成」の銘がはいる。45は中国製の染付皿。46も中国製の染付皿。底部からわずかに内彎しながら端部に至る器形で、見込みに卍文・宝珠文を描く。

47は波佐見焼で、見込みは蛇ノ目状に釉剥ぎし、草花文などを描く。高台は断面が三角形であるが、中国製に比べ分厚い。48は伊万里焼の大皿で、口径は24.2 cm、器高は5.2 cmである。底部外面には「大明成化年製」の銘があり、見込みには宝相華文を描く。

49～52は体部の丸い碗で、伊万里と波佐見焼がある。50の高台は低い三日月状で、外面には草花文などを描き、底部外面には「大明年製」の銘がある。

53・54は体部の下部で屈曲し、そこからほぼ垂直に立ち上がる器形の碗。53の内面の口縁端部には、四方擣文を描く。共に内面は白磁、外面には青磁釉を掛ける。

55は小口径の杯で、見込みには呉須で円圈を描く。56は合わせものの蓋である。内外面に山水文を描く。

2. 土製品 (第32図、図版21)

1～4は土錘である。1～3の平面形は、中央部がやや膨らむ細長い筒形状で、中心部に孔を設けている。

4は大型品で、平面形は楕円形状で内側を両面ともやや凹め、4カ所に孔を設けている。

3. 古銭 (第33図、図版17・18)

古銭については、海浜に近かったこともあり全体的に残存状況は良好でないため、銭種の判読が困難なものもある。銭種としては、寛永通宝が多く見られ、その他に少量の開元通宝、天聖元宝、大観通宝、至大通宝、洪武通宝、永楽通宝、無文銭がある。5は洪武通宝を模した「加治木銭」で、裏面には不明瞭であるが「治」という文字が鋳出されている。17は寛永通宝で裏面に「文」という文字が鋳出されていることから「文銭」と呼称されていた新寛永と考えられる。26の無文銭については、対岸の旧西国街道沿いに存在する¹⁾廿日市町屋跡の発掘調査においても、同様の形状を有するものが多数出土している。近世においては、廿日市と宮島は経済・文化面等においてお互いを補完するという関係性にあったと考えられている。また、このような関係性を、端的に表す傍証として、文献に「宮廿日市」という呼称が用いられていたことが知られている。出土した無文銭が、どのように鋳造され流通していたのかは、今後調査例の増加を待つて検討する必要があるが、対岸の廿日市町屋との関係性を窺わせていることから興味深い資料といえる。

4. 青銅製品 (第34図、図版19)

青銅製品は、海浜に近かったこともあり全体的に残存状況は良好ではない。出土品は、煙管(吸口)を主として小柄、毛抜、灰匙、飾金具類が出土した。

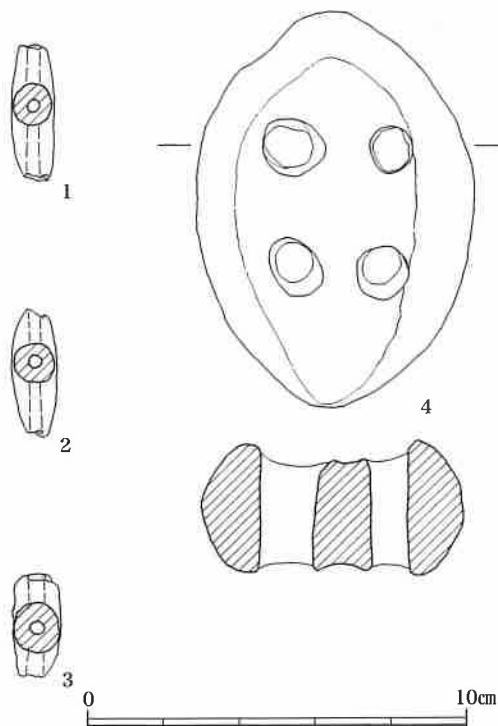
煙管

10は煙管の吸口部分である。すべて残欠のため、時期は明確にできないが、古泉弘氏の形態分類²⁾から羅宇との接合部分に補強帯が見られないこと、また肩のない直線的な形態であることから、IV類以降と推定できる。

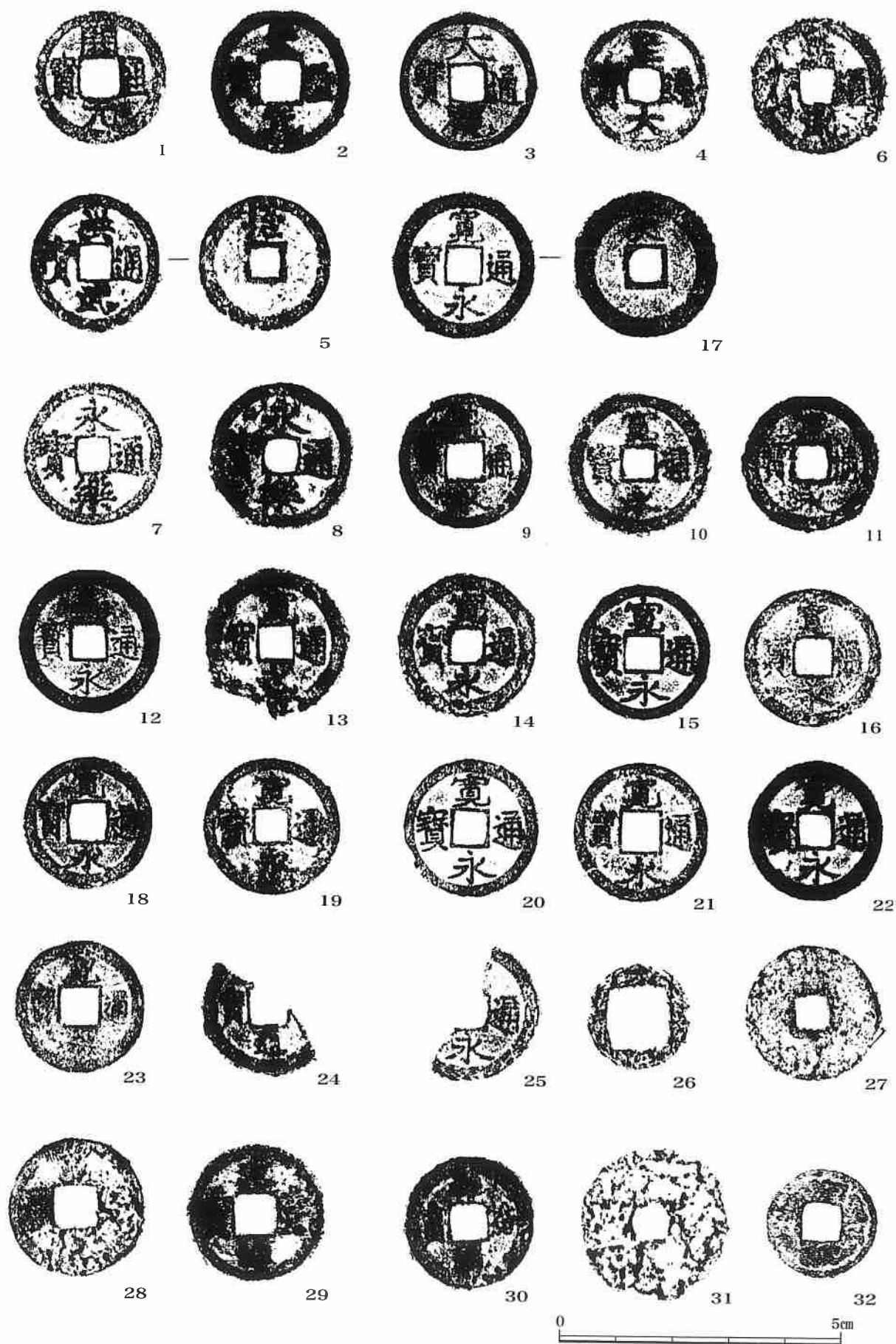
本遺跡では、吸口部分のみが一定の地区から出土するという特徴的な状況がみられる。このことについては、小川望氏が増加の一途をたどっていた90年代の江戸御府内の発掘調査成果から指摘され、再利用の形態を含め、廃棄の在り方についての検討が必要な旨を述べられており、今後の課題³⁾としたい。

小柄

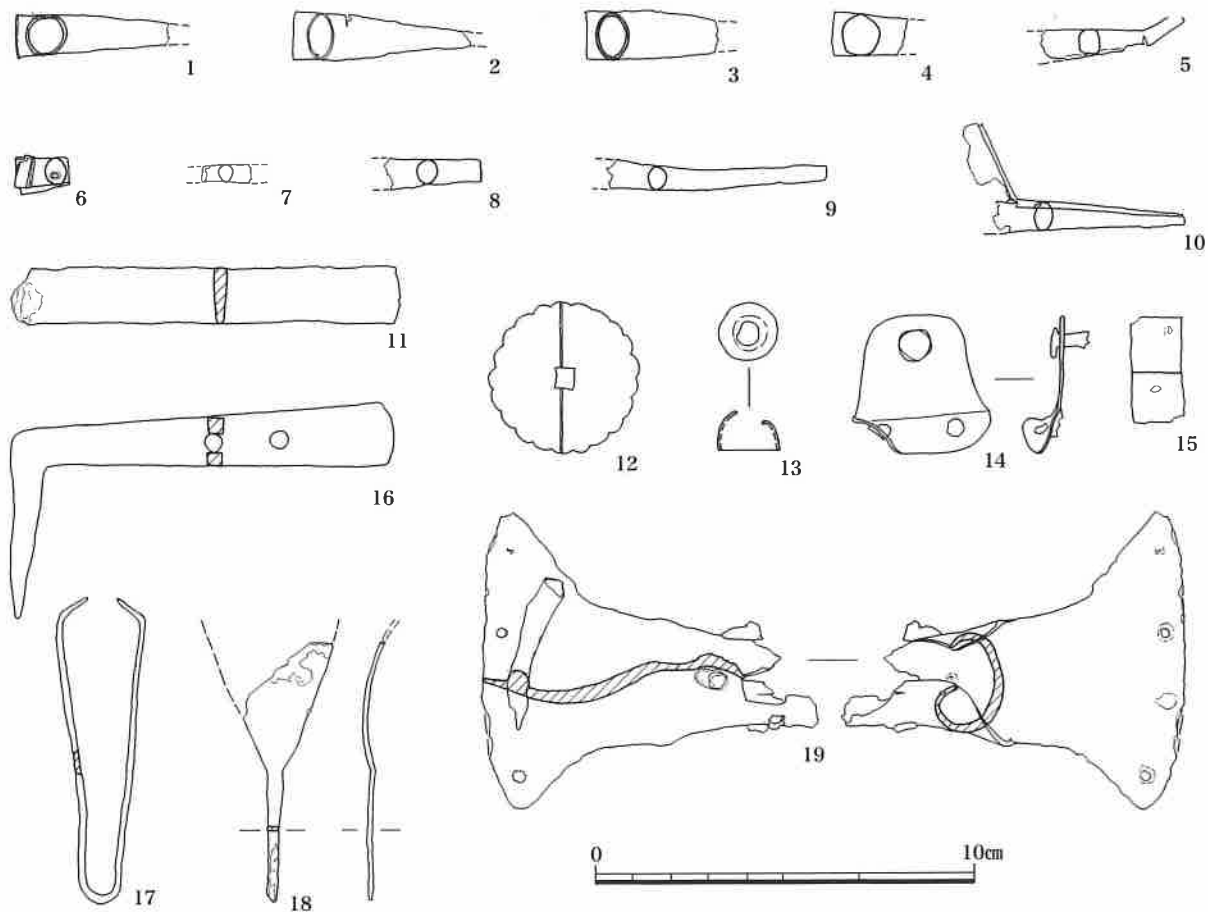
11は小柄で、刀身部分の残欠と考えられる。



第32図 土製品実測図(1:2)



第33图 古钱拓影(1:1)



第34図 青銅製品実測図(1:2)

毛拔

17は完形品の毛拔で、断面は台形状である。

灰匙

18は形態から灰匙と考えられる。建物1の石組溝内から出土した。

その他

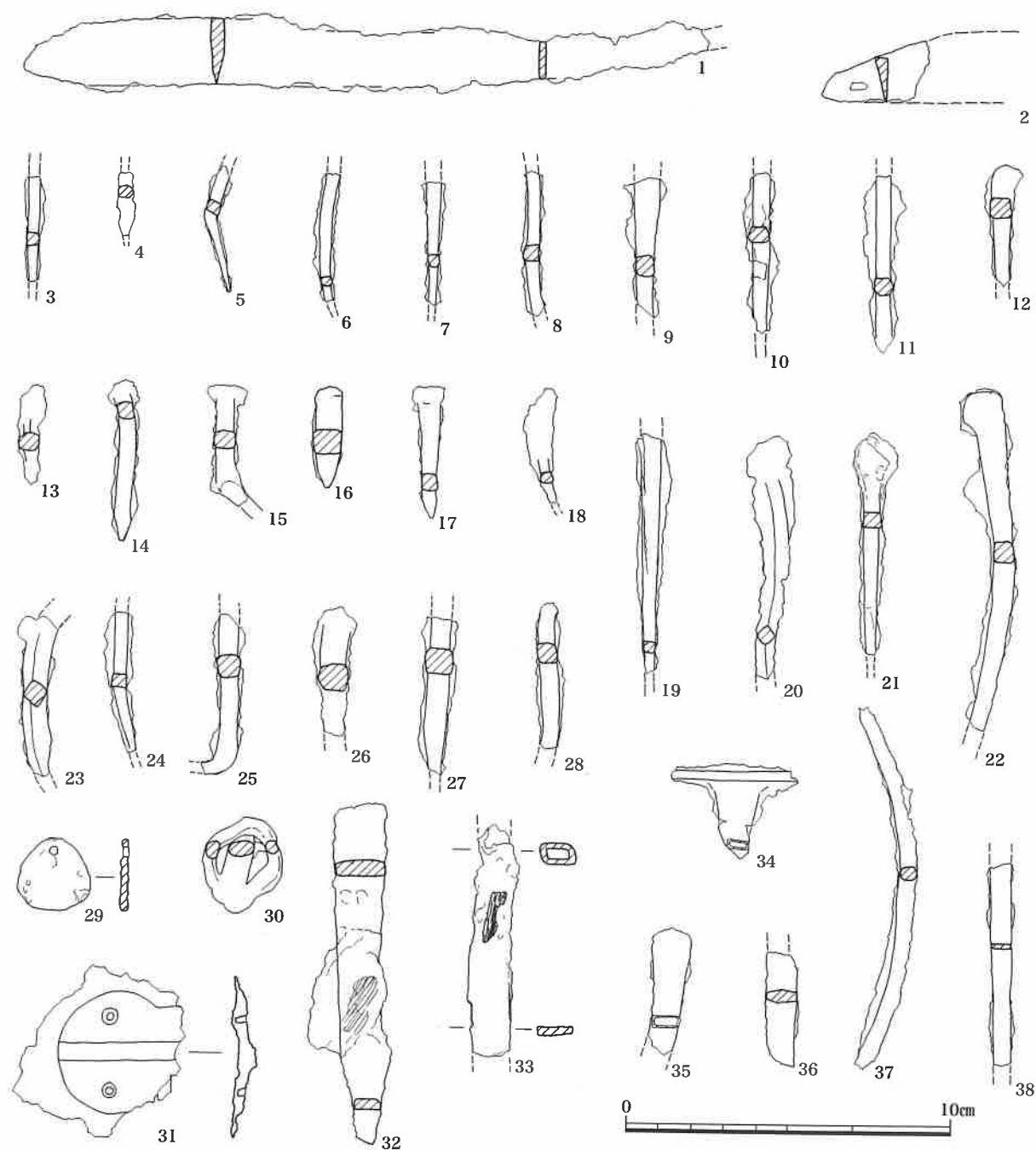
12～15は飾金具と考えられる製品である。12・13は釘隠しと考えられる。14は平面形が隅丸台形状で3か所に接合のための孔があり、そのうちの1か所にはリベット状の金具の残欠がみられる。16は用途不明であるが、「L」字状で一方の先端が尖っている。また一方には目釘孔と考えられるものが2つ認められる。19は残存形の平面形が撥状で、薄い板の一方を折曲げ袋状に成形している。撥状に開く側の端部には、釘を打込むための穴が3カ所みられる。形状から何らかの扉の金具と考えられる。

5. 鉄製品 (第35図、図版19・20)

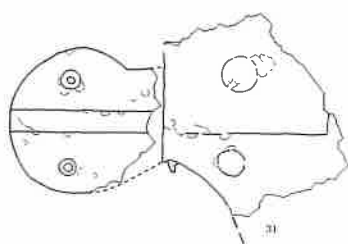
鉄製品は、出土品は、海浜に近かったこともあり全体的に残存状況は良好ではない。鉄釘を中心として、刃物・飾金具・用途不明製品が出土している。

刃物

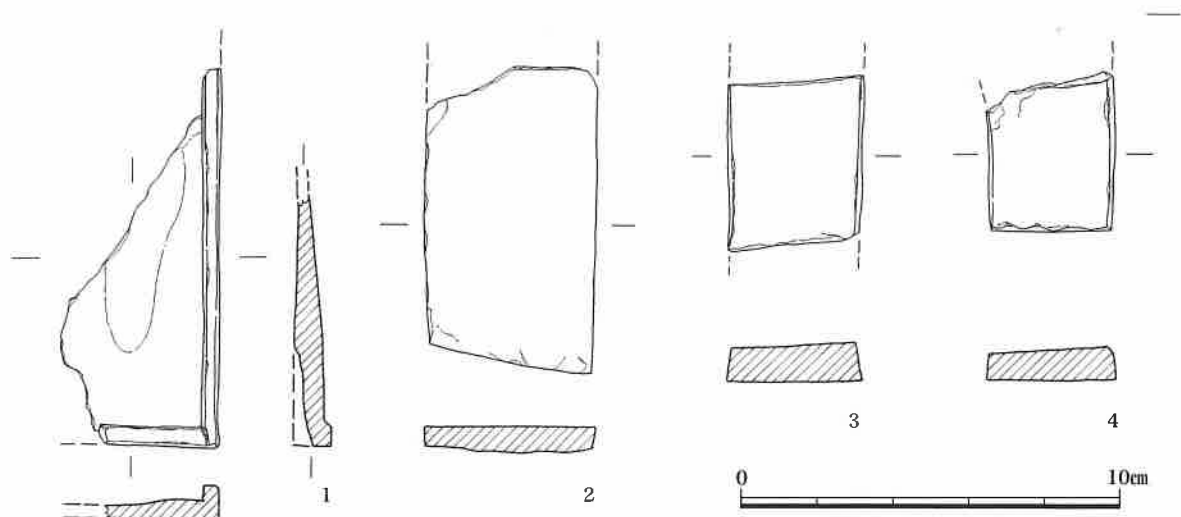
1・2は刃物である。1は包丁の可能性はある。2は切先と考えられる。



第 35 図 鉄製品実測図 (1:2)



第 36 図 金具 31 展開図 (1:2)



第37図 硯・砥石実測図(1:2)

鉄釘

3～28は鉄釘である。14・17を除いて残欠であるが、断面形は方形の頭部を折曲げた折頭型と考えられる。

用途不明製品

29は残存する平面形が隅丸三角形で、隅丸部分の一カ所に円形の孔がある。30は、平面形が隅丸の「日」の字形で、断面は円ないし楕円形状である。31は平面形が円形状で中央部に幅約6mmの一段高い部分があり、段を境としてそれぞれ1カ所(計2カ所)に円形の貫通していない孔がみられる。32・33は残存する平面形が長方形で、いずれも部分的に木質が残存している。34は平面形が「T」の字状である。35・36は残存形及び断面が長方形である。37は残欠で円弧状と推定する。断面は楕円形状である。38は残存形が鉄釘の酷似しているが、断面は長方形である。

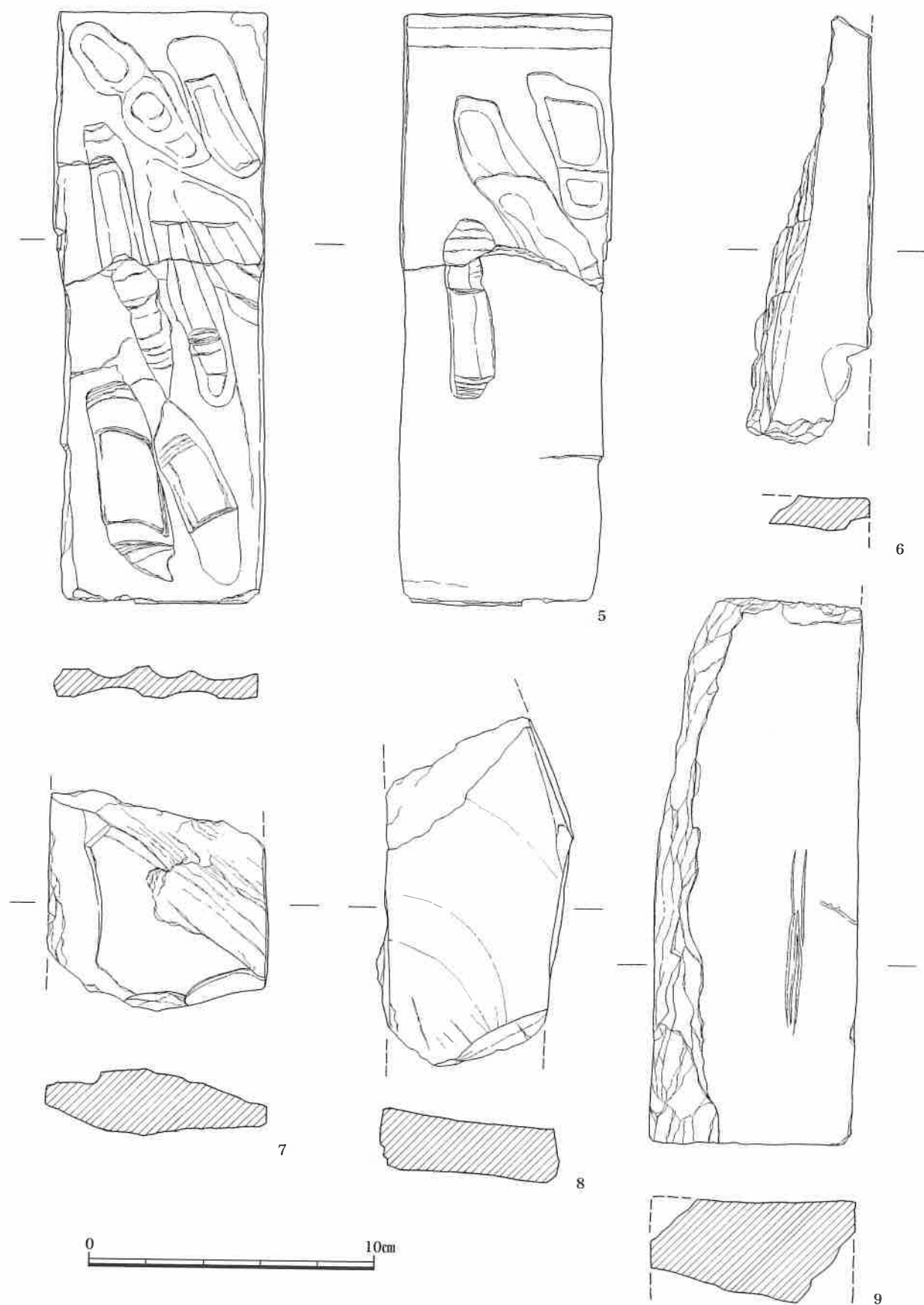
6. 石製品(第37～39図)

硯

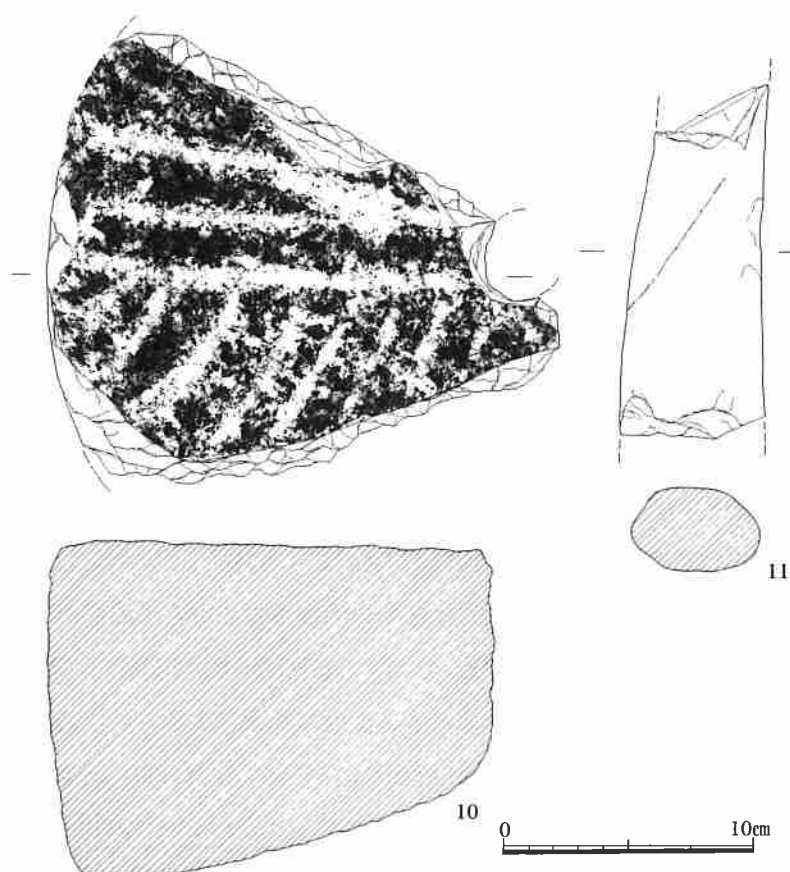
1は硯の残欠で、平面形が長方形の小型の長方硯と考えられる。石材は砂質片岩を用いている。

砥石

第37図2～4、第38図5～9は砥石である。5はほぼ完形品であるが、その他は残欠である。2～4は小型で、5～9は大型品と考えられる。石材は、すべて流紋岩質凝灰岩で県内からの産出はほとんどみられない。5は、両面に幅約1.5～2.0cm、長さ約4.0～6.0cmで「U」の字状の凹が斜行して多数みられる。この使用痕跡については、地元で現在伝統工芸品である宮島彫りを伝承している広川和男氏に聞き取り調査を行った。その結果、木材の細工に用いる刃物(現在の彫刻刀)で、丸刃に酷似したものであることがわかった。また、砥石の質については、仕上げの直前に使用したものではないかということであった。ところで、このような砥石は、細工を行いながらしばしば使用するそうで、本格的な職人であれば斜行せず、辺に対して平行になるように、「U」の字状の凹がみられるということである。なお、「U」の字状の凹の方向からすると、右利きの人が使用していたことが考えられる。



第 38 図 砥石実測図 (1:2)



第39図 石臼・石斧実測図(1:3)

石臼

10は石臼の残欠である。下臼部で、7本程度を一単位とする溝で区画されていると考えられる。石材は花崗岩である。

石斧

11は両端部を欠失しているが形状から石斧と推定した。石材は砂質片岩である。

厳島の大野瀬戸側では、縄文時代遺物包含地として南から大江遺跡、下室浜遺跡、上室浜遺跡、多々良瀉遺跡、大なきり遺跡が、小扇状地等に存在していることから知られている。今回の調査地は、白糸川によって形成された扇状地の付近であり、同時代の遺跡が存在している可能性が推定される。

註

- 1) 今田三哲「廿日市町屋跡の遺跡と遺物」『廿日市町史』通史編上 1988 年
『廿日市町屋跡』廿日市市教育委員会 1998 年
『廿日市町屋跡』財団法人広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第 185 集 1999 年ほか
- 2) 古泉弘『江戸の考古学』ニューサイエンス社 1987 年
- 3) 小川望「出土遺物からみる江戸の「タバコ」」『江戸文化の考古学』江戸遺跡研究会編 吉川弘文館 2000 年

VI まとめ

これまで宮島島内で発掘調査が行なわれた遺跡としては、菩提院遺跡、祝師屋敷跡、滝町児童公園、弥山道石畳があり、4 遺跡はすべて厳島神社後背地、南側にあたっている。このたび調査を行なった西大西町第 1 地点遺跡は、厳島神社の西方、大願寺に接する地に該当する。遺跡の調査面積はこれまで行われたものよりも広く、今後、町内でこれ以上の調査地を設けて実施することは困難であると思われる。

以下、今回の発掘調査で得た成果について記述しておきたい。

調査前、当該地は地元の人々によって「ふれあい花広場」とし草花などが植栽されていたが、昭和 40 年代までは宮島保養所が南北方向に走る道路に面して建てられていた。そのような状況から保養所の建物の存在した部分下の遺構についてはすでに破壊されている可能性が強いと考えられていたが、調査の結果、遺構は認めることはできなかった。しかしながら調査地内の建物跡以外では、近代、近世、中世の遺構を明らかにすることができた。検出された遺構のうち最初に近代、近世に比定されるものを瞥見しておきたい。

1. 近世の町屋の復原

まず、注目されるのは調査地東側で検出された東西方向の石列 1、拡張区で明らかになった石列 2・3 で町屋の地割石と考えられる。地割石(石列 1)は、東西長 11.5 m、幅 0.4 ~ 0.5m で、地面からの高さ 0.5m 程度を計測する。地割石西端から 2.8m と 8.5 m のそれぞれの間は試掘トレンチによって地割石が撤去されている。地割石の東端隅から南側に向かって、地割石は 5.6m までのび、1 段で構成される。地割石西側の積み方は 0.3 ~ 0.5m 大の花崗岩を 2 段にし、側面部分を北側に揃えて面をとっていることから考えて、この面が間口に該当しよう。なお、この地割石のなかでは西端の花崗岩が最も大きくて、小口部を北にしている点からすると建物跡の西側を示すものであろう。これに対して東側の地割石は西側とは異なり、花崗岩の小口部の部分を 1 ないし 2 段にし、北側に面をそろえている。遺存する長さは東端から西へ 1.5 m、そして南側へは石の抜き取り部分を含め約 4.5 m をはかる。小口部と側面部分を用いて北に面を揃えて築かれており、現長 3.9 m の規模を計測する。地割石の状況からすれば、東西 6.5 間×南北 3 間の 1 棟分の建物が推測されるが、ただちにこれを首肯することはできない。宮島には近世の町屋の配置を窺ううえで重要な絵図が 2 種類存在しており、1 枚は大願寺絵図で、もう 1 枚は天明 3(1783) 年の年記のある吉田家絵図である。前者には年紀の記載がないが吉田家絵図よりも先行するものと考えられ、『厳島信仰辞典』では元禄 14(1701) 年の年代が、また『厳島神社門前町』では寛永 2(1625) 年から 17 世紀末までの可能性が指摘されている。

ところで、今回明らかになった町屋の地割を大願寺絵図と吉田家絵図にあてはめてみると前者では該当する部分に町屋は描かれていないのに対して後者の絵図には当該地に町屋がみえている。今、吉

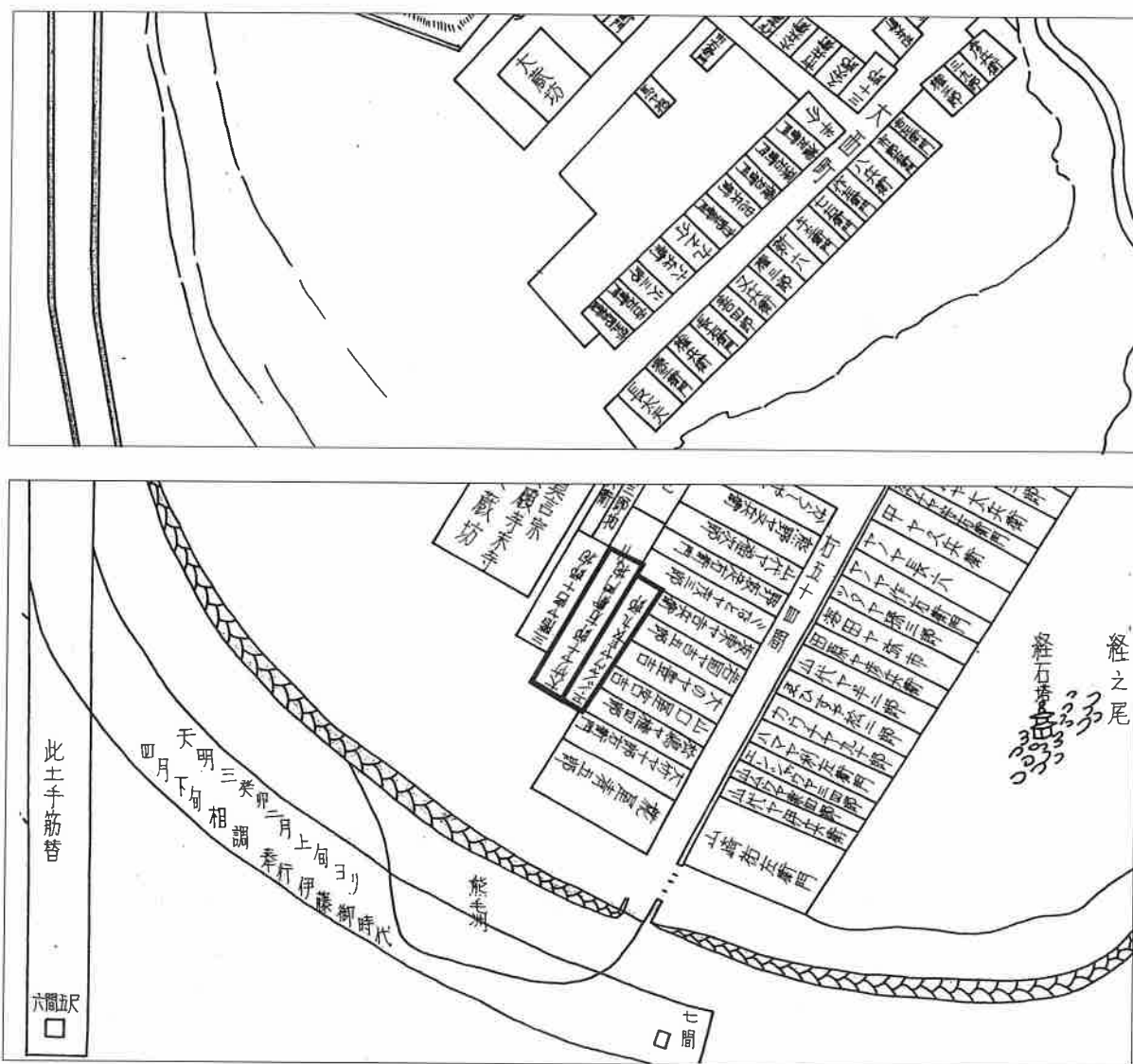
田家絵図と検出遺構とを比較すると1棟分と推測された屋敷は北側を間口とする2棟分の建物であることが判明した。2棟分のうち西側の屋敷には「エンシヤウヤ長九郎」、東側には「大竹ヤ十郎右衛門抱」との記載がある。絵図から計測できる間口は「エンシヤウヤ」が2.5間、奥行10間、「大竹ヤ」が間口3.5間、奥行11間である。検出された地割石は北側と東側部分のみであるが、絵図に対比してみると「大竹ヤ」は東端部から西側6.5mまでと考えられる。この位置には石列のなかで最も大きい約0.7mの花崗岩が置かれており、これが「大竹ヤ」と「エンシヤウヤ」の境界にあたるものと推定でき、吉田家絵図と合致する。地割が築かれた時期については分明ではないが、大願寺絵図が17世紀末までに作図されたものであるならば、これ以前にさかのぼる可能性はなく、2棟分の屋敷は18世紀前半から中頃にかけての時期が考えられる。

一方、「大竹ヤ十郎右衛門抱」宅の地割石から北側4m弱の地(石列2)と5.4mの地(石列3)に「大竹ヤ」に並行する東西の地割石が確認された。東北隅から東西方向に8mをはかるが、その間には試掘トレンチによって地割石が取り除かれている部分もある。石積みにあたっては1ないし2段の花崗岩の小口部を北側に揃えて面を形成する。この地割石の西端は、使用された石材が同大であることからするとさらに西側にのびている可能性もある。また、東北隅には0.4×0.4mの石組がみられ、浸透枅とも考えられる。これに続く幅0.2mの排水溝が東西方向5.7mにわたって認められ、底には0.2m程度の花崗岩が敷かれている。この花崗岩のうえには東から約1.5mの間に丸瓦が用いられている。そして丸瓦より上部には瓦質の土管がおかれており、時期的には若干新しくなつてつくられたものであろう。建物の時期は出土遺物などから幕末期と推定できる。規模は間口が4.5～5間、奥行は建物が同一であれば12間となり、規模の大きな建物となる。そして、北側にはさらに東西に走る地割石を確認することができ、現長9.4mで、東北隅には0.5×0.5m大の花崗岩を据えている。地割石の北側には小口部と側面部分をもって面を構成し、丁寧に揃えられている。なお、東端よりの北側と東北隅から南端よりの所に0.9×0.45mの面取りの行われた花崗岩の一枚石があり、いずれも入り口に該当するのではなかろうか。そして地割石から推測される建物の規模は間口5間以上、奥行12.5間と考えられ、拡張の行われた時期は明治に入ってからであろう。そしてこれらから派生するいくつかの問題点についても触れておきたい。

第1には地割石の有り方である。本例の地割石は屋敷地の四面に配置された状況ではなく、間口と建物の東側部分のみに認められた。対岸の廿日市町屋跡では、地割石は四面に回っているようで、建物の区画が明瞭である。当遺跡の地割石も四面に存在し、後に除去された可能性も無くはないが、当初から置かれていなかったのではなかろうか。つまり人目につきやすい部分のみを意識して築いたと推測できる。このような方法が町内一円で行われているのか否かについては、今後の検討課題にもなるが、上屋構造の研究とともに合わせて進めなければならない。次に考えておきたいのは建物跡が北側に拡大していることである。拡張区の地割石は「大竹ヤ」に並行していることから「大竹ヤ」の建物が拡張されたことを示しているものであろう。そうすると拡張部の土地関係が当時どのような状況にあったのか詳らかではないが、海岸線付近における土地所有権の様相を考えるうえで重要な遺構

となるであろう。そして、吉田家絵図から本遺構を検討してきたが、描写された町屋の規模と本遺構がほぼ一致したことは、逆に絵図が正確に描かれていることを物語っており、将来、考古学調査などで町屋の状況を把握する際には重視される資料といえよう。

また、調査で明らかになった浸透枡(石組1・4・6～8・10～12)についても記しておきたい。この遺構は、町内全域に認められるものか、あるいは大西町を含む西町だけに築かれたものか、現状では把握できていないが、今日的な問題を有していることから十分に注目に値する。『厳島神社門前町』『防災の現状と課題』の項に次のような記載がある。「前略一滴潮と大雨が重なった場合、海への雨水排出機能が働きにくくなって排水溝が内部冠水し、マンホールなどから通りに水が溢れ出し、床下、床上浸水する被害がしばしば生じている一後略」。冠水現象は当町のみならず全国の都市で現在発生しており、大きく問題化している。千葉県松戸市では浸透枡を設置する条例を全国ではじめて設けて対策がとられている。当遺跡の浸透枡は江戸時代後半から明治にかけての時期が考えら



第40図 宮島町割図(部分)

上 大願寺絵図、下 吉田家絵図(宮島町史編纂室作図)

れ、まさに先駆的な意味をもつものであろう。浸透枘が設置されるようになった理由は明確ではないが、町屋の構築基盤土が砂礫であることに起因しているのかもしれない。この基盤土の砂礫は調査地南半の大部分を占めているのに対して北側は貝層によって占められている。貝層は深いところで0.7～0.8mをはかり、南から北に向かって傾斜して堆積している。形成された時期は出土遺物よりみて16世紀後半から17世紀前半と考えられ、かなり長期にわたっていたことが窺える。ところで、当貝層を築いた人々の生活基盤がいずれの地であったのかについては詳らかではないが、文禄4(1595)年「厳島寺社穂田元清等抱屋敷町割書付」(野坂文書63)が注目でき『厳島神社門前町』では本史料に基づいて地割復元図の作成が行われている。西大西町第1地点遺跡付近には熊毛洲が示され、現大願寺周辺地には「るすくち小路」として36筆の屋敷地が想定されている。貝層と想定地との距離は100m程度の至近地で、時代的にも矛盾がないところからみて該地の居住者の廃棄した貝などと考えられる。

2. 中世の石垣(護岸)

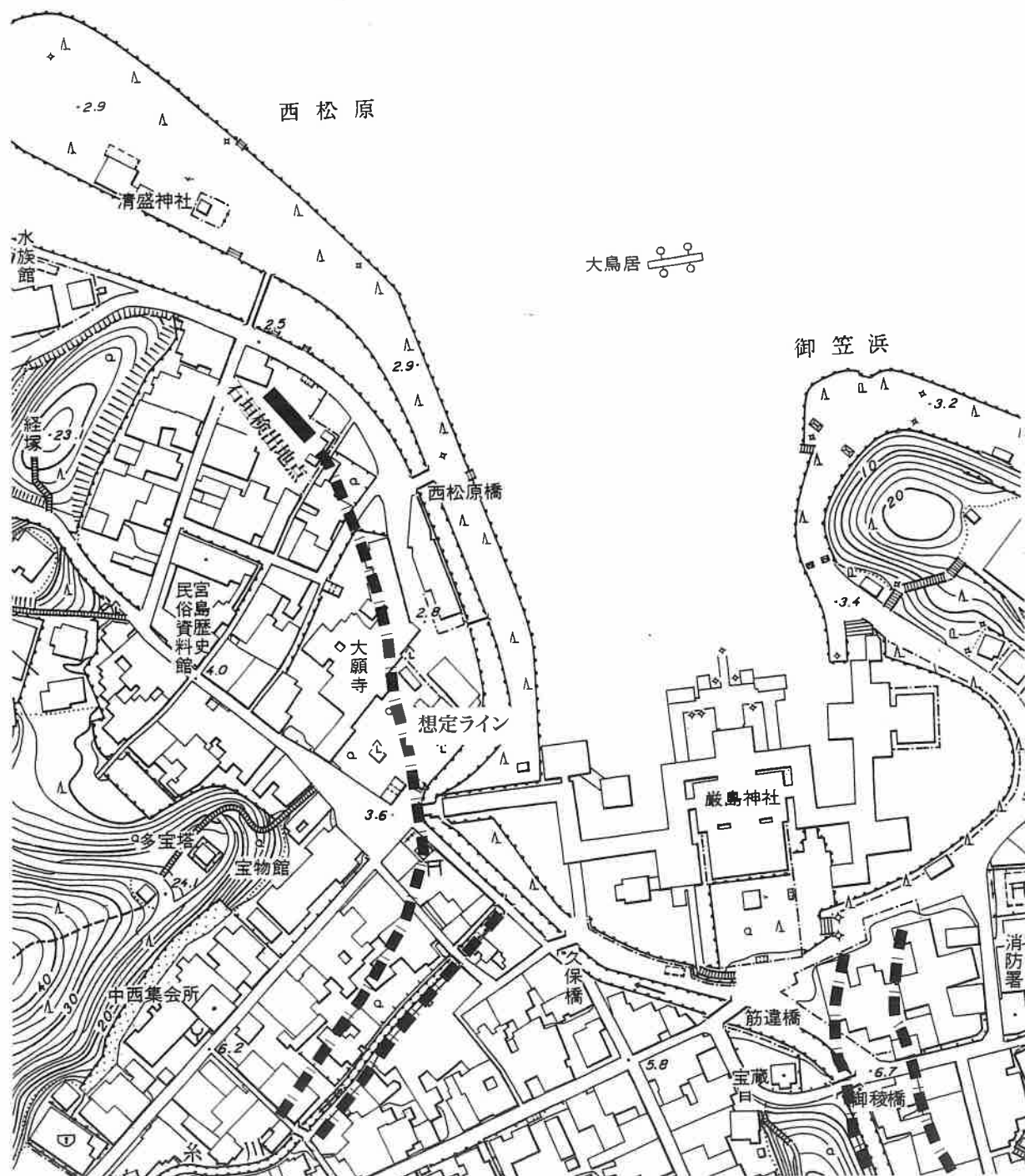
一方、この貝層下から東西方向にのびる石垣を検出した。調査にあたって広島県教育委員会・廿日市市教育委員会から近世遺構のうち、建物の地割石部分を残して調査を実施するよう指示をうけたため、調査地内における石垣の全容を解明するまでにはいたっていない。検出できた石垣は、西側部分で8m、中央部で1.5m、調査地外の1.5mである。なお、調査地外で確認された1.5mの石垣を含め、廿日市市教育委員会の試掘によって西側に8m程度の存在が確認されている。石垣は下段に0.15～0.2m大の花崗岩の割石を敷き、その上に0.5～0.6m大の花崗岩の小口を北側に向けて築いている。この花崗岩は水平位の状態に築くのではなく三角形にし、それぞれの間に0.2m大の小礫をかませて水平面をつくりだしている。最上段には0.7～0.8m大のかなり大きい花崗岩をおいて安定化をはかったと想定される。全体の高さは約1.5mで、宮島町内でこのような積み方をもつ石積は現在のところ確認できていない。石垣の性格については詳らかでない部分もあるが、護岸としての機能を有していたのではないかと考えられる。この護岸の構築時期についてであるが、石垣内から遺物が検出できなかったため定かでないが、16世紀後半から17世紀前半に形成された貝層下に存在していたことから、当然近世以前の築造であることは明白である。周辺から出土した遺物を見てみると最も古いものは14世紀代、15世紀代に比定される中国製青磁碗で、その他15世紀・16世紀中葉の備前焼などがある。遺物から見る限りでは13世紀以前に構築された可能性は低いと思われる。また、石垣の北側2mの地点にある丸太材2本のうち、南側の1本について放射性炭素年代を求めたところ1530～1560年の測定値を得ている。以上のような状況を踏まえて推測するならば、構築年代は大まかに14世紀から16世紀中葉に位置づけることができるであろう。そして、他遺跡におけるこれと同様の石積方法をもつものは16世紀代に比定されている場合が多いが、本例は文献史料の上から検討すると構築年代が古くなる可能性もある。正安2(1300)年の「伊都岐島社未造殿舎造営料言上状案」(大願寺文書1)には平舞台などの造営計画とともに「御新(霊)河二ヶ所橋二十間、瀧河橋

三ヶ所十七間、河塙(堰)両方三町余」の案がみえてる御新河は現在の紅葉谷川、瀧河は白糸川に該当する。案にあるものが実際に施行されたのか否かは文献史料のうえからは不明であるが、当遺跡で明らかになった石垣は、両川のうちの瀧河河堰である蓋然性が極めて高い。三町余の距離を本遺構西端から延長していくと現在の大願寺境内地を通り、中西集会所付近に至る長さになる。言上状案に見える平舞台、左・右楽屋や戎宝殿(左・右客神社)は、正中2(1325)年6月25日の大風で被害をうけている(「刑部大輔景教大鳥居之日記」厳島野坂文書1562)ことからすると、すでに造営が行われていた可能性が考えられる(『宮島町史 特論編・建築』宮島町 1997年)。御新河、瀧河の河塙も同様に実行されていたとするならば、14世紀代おそくとも15世紀代には築かれていたと思われる。それはまた、宮島の実質的支配者であった棚守房顕の「房顕覚書」からも考えられる。彼は明応3(1494)年に出生し、天正18(1590)年に逝去するが、「覚書」にはその間、明応4(1495)年の出来事をはじめとして永正3(1506)年以降、天正9(1581)年まで宮島を中心にして起きた事柄について記録したものであるが、この「覚書」のなかには、大工事であったと考えられる石垣の造営に関する記事はまったくふれられていないのである。このような点からすると16世紀代とするにはやや躊躇せざるを得ない。いずれにしても今後、他遺跡の調査例などを通じて検討する必要がある。

次に石垣が築かれた目的について考えてみることにする。御新河、瀧河のうち往時、後者は現在の大聖院前を流下して厳島神社廻廊西出口付近を河口とする幅25m前後の河川であったと推定される。計画された3町余の護岸のうち河口から上流にかけて築造されたものと今回確認できた遺構を含む護岸では構築意図が大きく異なっていた可能性がある。上流では護岸を築くことによって土砂の流出防止と治水対策を行ない、さらに3本の橋をかけるための基礎となることを主目的にしていたのではないかと推測される。これに対して下流にあたる護岸は直接瀧河の流れの影響をうけるところではなく、他の目的で築かれていたと考えた方がよいように思われる。築かれた護岸最上段の海拔高は1.8m前後で、厳島神社の建物の床板の海拔高とほぼ同程度であり、この高さが海からの影響を受けるのが比較的軽微であることからすると、一面では海に対する護岸の性格をもちながらも他の性格を考慮しなければならない。それでは最大の目的がいかなる点にあったのか推考しなければならないが、現時点では西側に堆積する土砂が厳島神社に流入するのを阻止することに視点がおかれていたのではないかと考えている。遺跡の西に位置する経尾山の先端部に存在する経尾経塚は、出土遺物から平安時代末に築かれたものであることが明らかになっている。平家一門による造営である可能性が高く、もしこれが首肯されるならばはたして現在の状況のような立地場所に築くかということである。経塚の東・西・北は直近まで崖面が迫り、まさに崩壊寸前の状態にある。往時、すでに危険な状況を呈していた丘陵ならば、経塚を築く場所の再検討や丘陵面を削平して築造していたはずである。これらの点を考慮するとその後における丘陵斜面の崩落がかなり激しかったことを物語っており、崩落した土砂の流失を防ぐことを十分念頭において計画が練り上げられたのではなかろうか。また、大胆な推測が許されるならば厳島神社の造営にあたって、もっとも考慮されたのが、境内地内に海から打ち寄せる土砂対策ではなかったかと思われる。現在でも土砂は境内地の西、能舞台周辺にうず高く堆積

しており、常時、人力によって運び出しが行われている。当時、この排土する機能として考えられたのが御新河・瀧河の両河道であったと推定される。

その後、天正9(1581)年、巖島神社南側部分を取り囲むように護岸が築かれたことにより御新河・瀧河の両川は一本化され、御手洗川となって西側に流下するとともに土砂の排土機能は完全に失われた。それに代わって神社境内地の土砂は人手によって排出するしか方法がなくなり、近世以降では「御洲掘」の行事などを設けて排土を行うようになったものと推測している。



第41図 石垣想定図 (1:2,500)

一方、護岸北側で確認できた2本の丸太材の性格についても言及しておきたい。調査は前記した事情により丸太材の東側は不分明のままであるが、もし仮に東側にも続いて丸太材が存在しているのであれば、丸太材は護岸を築くためにおかれた根太として利用されたのではないかと思われる。「覚書」に「去ル天文十年五月四日、七日ノ大水山河クつれ、社頭廻砂ハマル間 三月廿三日破リ土ヲアケ」の記事がある。御新河から発生した土石流を報じたものであり、土石流が最終的に排除されたのは天正9年と考えられており(『棚守房頭覚書付解説』)、実に40年余りが経過している。その間、排土の計画や一部実施された可能性は十分に想定でき、丸太材はかかる状況の一端を示しているものではないだろうか。丸太材の内、1本の放射線炭素年代は1530～1560年であり、復旧工事に伴い本材が根太としておかれていたとしても年代的に矛盾はしない。そして、これを指示した人物は大内義隆に当てるのが妥当ではなかろうか。しかしながら、天文20(1551)年、義隆の突然の死によって計画も頓挫してしまい、丸太材は放置された状況になったと考えられる。いずれにしても今後、この護岸の延長上で調査が行われればさらに具体的に把握することができるであろう。

以上、調査から得られた成果について記述してきたが、最後に厳島神社と護岸との関係について若干触れておきたい。

前述したように護岸の主目的は土砂の流出防止にあったと考えているが、両者の関係で検討するならば、護岸は単に土木事業として行われたものではないと思われる。「伊都岐島未造殿舎造営料言上状案」をみれば平舞台、左楽屋、右楽屋などとともに併記されており、厳島神社全体の造営計画のなかに位置づけられていることから窺知できる。また、護岸の高さからも指摘できる。防災を目的とする護岸であれば、比較的高く築かれていても不思議ではないが、建物の床面と同程度であることは当初から意図的に計画が行われていたことを物語っている。もし、護岸の高さが神社の軒先ぐらいの高さをもっていたならば、海からの眺望は神社を狭隘にみせ、強い圧迫感を与えていたのではなかろうか。しかし、高さを減じて床面と平行する高さにすることによって神社と西側の面が一体化し、海から望む景観は空間的にも広がり、島を訪れる人々に一層訴えるものが大きくなったのではないかと考えられる。その後、護岸の築造によって地盤の安定化が促された西町には、神社や大願寺と有機的な関係をもつ町屋が形成されていき、現在の状況につながったといっても過言ではないであろう。

今後、これらのことを含め宮島についてさらなる検討を進めていく必要がある。

付載 自然科学分析調査報告書

廿日市市大西町遺跡における自然科学分析

株式会社 古環境研究所

I. 放射性炭素年代測定

1. はじめに

放射性炭素年代測定は、光合成や食物摂取などにより生物体内に取り込まれた放射性炭素 (^{14}C) の濃度が、放射性崩壊により時間とともに減少することを利用した年代測定法である。樹木や種実などの植物遺体、骨、貝殻、土壌、土器付着炭化物などが測定対象となり、約5万年前までの年代測定が可能である。

2. 試料と方法

試料名	地点・層準	種類	前処理・調整	測定法
No. 1	柱材 (丸太)	木材 (マツ属複雑管束亜属)	acid/alkali/acid	AMS

acid/alkali/acid : 酸-アルカリ-酸洗浄, AMS : 加速器質量分析法 (Accelerator Mass Spectrometry)

3. 測定結果

試料名	測定No. (Beta-)	未補正 ^{14}C 年代 (年BP)	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	^{14}C 年代 (年BP)	暦年代 (較正年代) (2σ :95%確率, 1σ :68%確率)
No. 1	253280	270 ± 40	-24.1	280 ± 40	交点 : Cal AD 1640 2σ : Cal AD 1490-1670, 1780-1790 1σ : Cal AD 1530-1560, 1630-1660

BP : Before Physics (Present), Cal : Calibrated, BC : 紀元前, AD : 紀元後

(1) 未補正 ^{14}C 年代

試料の $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比から、単純に現在 (AD1950年) から何年前かを計算した値。 ^{14}C の半減期は5,730年であるが、国際的慣例により Libby の5,568年を用いている。

(2) $\delta^{13}\text{C}$ 測定値

試料の測定 $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比を補正するための炭素安定同位体比 ($^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$)。この値は標準物質 (PDB) の同位体比からの千分偏差 (‰) で表す。試料の $\delta^{13}\text{C}$ 値を-25(‰)に標準化することで同位体分別効果を補正する。

(3) ^{14}C 年代

$\delta^{13}\text{C}$ 測定値により同位体分別効果を補正して算出した年代。暦年代較正にはこの年代値を使用する。

(4) 暦年代 (Calendar Age)

過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中 ^{14}C 濃度の変動および ^{14}C の半減期の違いを較正することで、より実際の年代値に近づけることができる。暦年代較正には、年代既知の樹木年輪の詳細な ^{14}C 測定値およびサ

ンゴのU/Th（ウラン/トリウム）年代と¹⁴C年代の比較により作成された較正曲線（IntCal04）を使用した。

暦年代の交点は、¹⁴C年代値と較正曲線との交点の暦年代値を示し、 1σ ^{シグマ}（68%確率）と 2σ （95%確率）は、¹⁴C年代値の偏差の幅を較正曲線に投影した暦年代の幅を示す。したがって、複数の交点や複数の 1σ ・ 2σ 値が表記される場合もある。

4. 所見

加速器質量分析法（AMS）による放射性炭素年代測定の結果、廿日市市大西町遺跡から出土した柱材では 280 ± 40 年BP（ 1σ の暦年代でAD1530～1560, 1630～1660年）の年代値が得られた。

文献

Paula J Reimer et al., (2004) IntCal04 Terrestrial radiocarbon age calibration, 26-0 ka BP. Radiocarbon 46, 1029-1058.

尾寄大真（2005）INTCAL98からIntCal04へ．学術創成研究費 弥生農耕の起源と東アジアNo.3－炭素年代測定による高精度編年体系の構築－, p. 14-15.

中村俊夫（1999）放射性炭素法．考古学のための年代測定学入門．古今書院, p. 1-36.

II. 樹種同定

1. はじめに

木材は、セルロースを骨格とする木部細胞の集合体であり、解剖学的形質の特徴から樹種の同定が可能である。木材は花粉などの微化石と比較して移動性が小さいことから、比較的近隣の森林植生の推定が可能であり、遺跡から出土したものについては木材の利用状況や流通を探る手がかりとなる。

2. 試料

試料は、廿日市市大西町遺跡から出土した柱材（丸太）1点である。

3. 方法

カミソリを用いて新鮮な横断面（木口と同義）、放射断面（柾目と同義）、接線断面（板目と同義）の基本三断面の切片を作製し、生物顕微鏡によって40～1000倍で観察した。同定は、解剖学的形質および現生標本との対比によって行った。

4. 結果

分析の結果、マツ属複維管束亜属 *Pinus subgen. Diploxylon* と同定された。以下に同定根拠となった特徴を記し、各断面の顕微鏡写真を示す。

マツ属複維管束亜属 *Pinus subgen. Diploxylon* マツ科

仮道管、放射柔細胞、放射仮道管及び垂直、水平樹脂道を取り囲むエピセリウム細胞から構成される針葉樹材である。横断面：早材から晩材への移行は急で、垂直樹脂道が見られる。放射断面：放射柔細胞の分野壁孔は窓状である。放射仮道管の内壁には鋸歯状肥厚が存在する。接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型であるが、水平樹脂道を含むものは紡錘形を呈する。

5. 所見

樹種同定の結果、廿日市市大西町遺跡から出土した柱材（丸太）は、マツ属複維管束亜属と同定された。マツ属複維管束亜属は、土壌条件の悪い岩山に生育し二次林を形成するアカマツと、砂地の海岸林を形成するクロマツとがあり、どちらの材も水湿に良く耐える材である。温帯域に広く分布する常緑高木で、当時の遺跡周辺もしくは近隣の地域で採取可能な樹種であったと考えられる。

文献

島地 謙・佐伯 浩・原田 浩・塩倉高義・石田茂雄・重松頼生・須藤彰司（1985）木材の構造．文永堂出版，290p.

島地 謙・伊東隆夫（1988）日本の遺跡出土木製品総覧．雄山閣，296p.

山田昌久（1993）日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成－用材から見た人間・植物関係史．植生史研究特別1号．植生史研究会，242p.

CALIBRATION OF RADIOCARBON AGE TO CALENDAR YEARS

(Variables: C13/C12=-24.1;lab. mult=1)

Laboratory number: **Beta-253230**

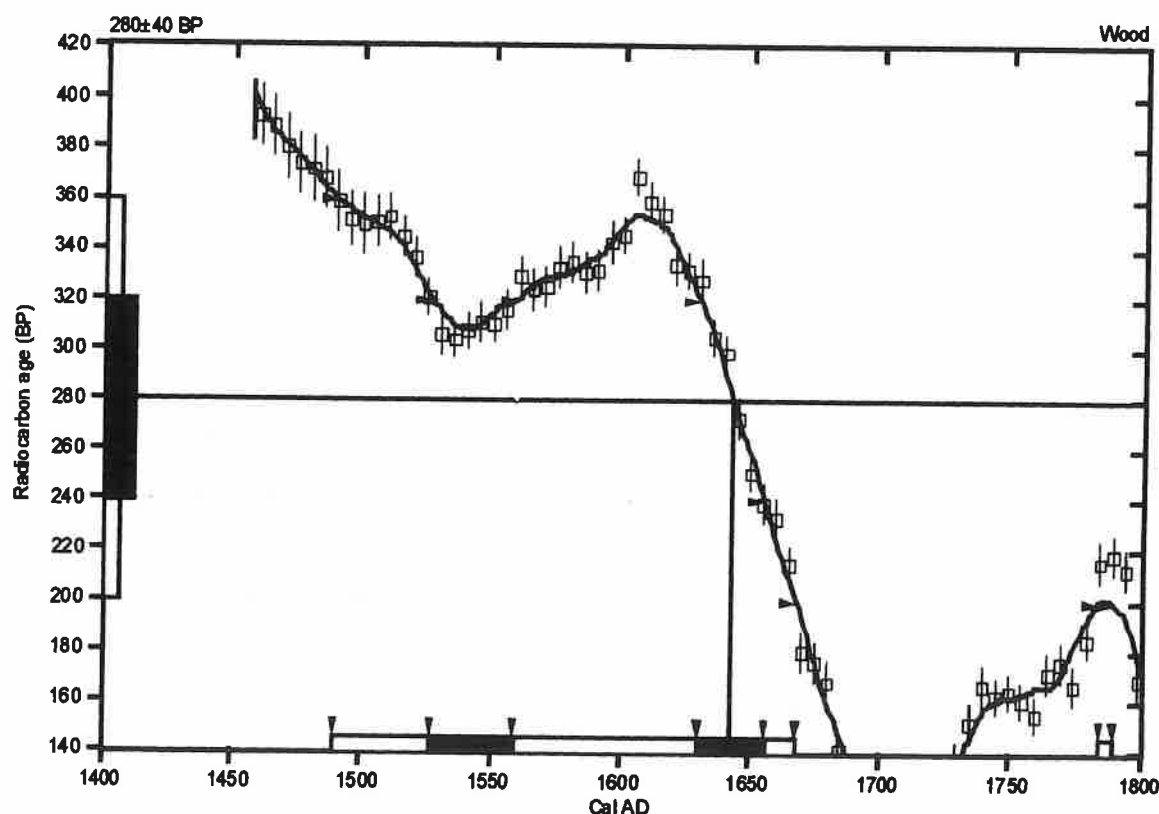
Conventional radiocarbon age: **280±40 BP**

2 Sigma calibrated results: **Cal AD 1490 to 1670 (Cal BP 460 to 280) and
(95% probability) Cal AD 1780 to 1790 (Cal BP 160 to 160)**

Intercept data

Intercept of radiocarbon age
with calibration curve: **Cal AD 1640 (Cal BP 310)**

1 Sigma calibrated results: **Cal AD 1530 to 1560 (Cal BP 420 to 390) and
(68% probability) Cal AD 1630 to 1660 (Cal BP 320 to 290)**



References:

Database used

INTCAL04

Calibration Database

INTCAL04 Radiocarbon Age Calibration

IntCal04: Calibration Issue of Radiocarbon (Volume 46, nr 3, 2004).

Mathematics

A Simplified Approach to Calibrating C14 Dates

Talma, A. S., Vogel, J. C., 1993, Radiocarbon 35(2), p317-322

Beta Analytic Radiocarbon Dating Laboratory

4985 S.W. 74th Court, Miami, Florida 33155 • Tel: (305)667-5167 • Fax: (305)663-0964 • E-Mail: beta@radiocarbon.com



Consistent Accuracy...

Delivered On Time.

Beta Analytic Inc.
4985 SW 74 Court
Miami, Florida 33155 USA
Tel: 305 667 5167
Fax: 305 663 0964
Beta@radiocarbon.com
www.radiocarbon.com

Mr. Darden Hood
Director

Mr. Ronald Hatfield
Mr. Christopher Patrik
Deputy Directors

Quality Assurance Report

This report provides the results of reference materials used to validate radiocarbon dating results on unknown materials, prior to reporting. Known age reference materials were analyzed as QA measurements to verify the accuracy of the results. These are analyzed in multiple detectors. To test accuracy, the "blind sample" was measured in TWO separate detectors without the engineers knowing the age. This report quotes the results of the QA measurements.

Report Date: December 22, 2008
Submitter: Mr. Kazumi Asai / Mr. Sumihisa Matsuyama
Sample: Beta-253230

QA MEASUREMENTS

TIRI wood standard (international standard)

Expected value:	4500 +/- 50 BP
Measured value:	4490 +/- 40 BP
Agreement:	accepted

TIRI wood standard (international standard)

Expected value:	4500 +/- 50 BP
Measured value:	4500 +/- 40 BP
Agreement:	accepted

Blind sample

Known age:	8320 +/- 40 BP
AMS age:	8310 +/- 60 BP
Agreement:	accepted

Background signal

Expected value:	39000 to 48000 BP
Measured value:	45370 +/- 550 BP
Agreement:	accepted

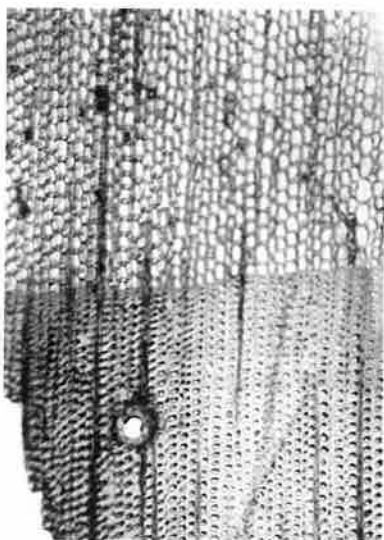
COMMENT: All standards were within accepted ranges. (TIRI stands for Third International Radiocarbon Inter-comparison. This material has a very well known age.) The "Blind sample" is a sample that was measured at least twice in a detector at different times.

Validation:

Darden Hood

Date: December 22, 2008

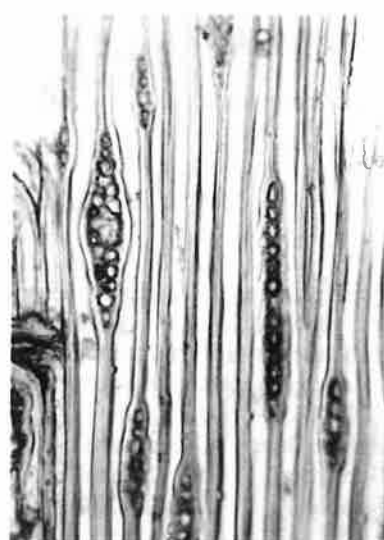
廿日市市大西町遺跡の木材



横断面 ————— : 0.5mm
柱材 (丸太) マツ属複維管束亜属



放射断面 ————— : 0.1mm



接線断面 ————— : 0.2mm

付 表

第2表 土器・陶磁器観察表

図	番号	器種	器形	口径	底径	器高	地点	遺構・層位	調整など	備 考
27	1	土師器	皿	4.6	2.8	1.4	4T		底部糸切り	
27	2	土師器	皿	6.9	4.0	2.1	2T	土坑	底部糸切り	
27	3	陶器	花入	—	6.0	(7.8)	5T			備前窯
27	4	陶器	鉢	18.8	—	(5.3)	2T	土坑		備前窯、外面「+」印
27	5	瓦質	甕	22.5	—	(5.2)	1T		内面刷毛調整	
27	6	瓦質	擂鉢			(3.3)	2T			
27	7	中国製青磁	碗	—	5.6	(2.1)	2T	土坑		
27	8	中国製白磁	皿	—	7.0	(1.4)	1T			
27	9	磁器	皿	13.5	6.0	3.0	2T			見込み蛇ノ目釉剥ぎ
27	10	中国製染付	盤			(5.1)	2T			漳州窯皿
27	11	磁器	碗	9.7	—	6.7	8T			初期伊万里碗
27	12	磁器	碗	9.4	3.8	5.2	2T			波佐見染付碗
27	13	白磁	器物	—	5.0	(3.6)	G5 拡張区			
28	14	土師器	皿	8.4	6.2	1.0	拡張区	石組溝		灯明皿
28	15	土師器	皿	—	—	1.1	C4			
28	16	灰釉陶器	皿	(11.7)	5.7	2.4	A3 畦			瀬戸・美濃窯
28	17	陶器	皿	12.3	—	(2.5)	C4	貝層下砂層		瀬戸・美濃窯
28	18	陶器	皿	9.7	2.5	—	B4	貝層、3層		備前窯
28	19	陶器	碗	—	4.2	(2.7)	B4	貝層、7層	糸切り高台	外面、透明釉
28	20	陶器	碗	—	4.8	(2.1)	B4	貝層、7層		
28	21	陶器	碗	—	5.5	(2.0)		貝層7層		
28	22	陶器	茶入	4.6	—	(2.8)	A4	貝層下砂層		備前窯
28	23	陶器	茶入	—	4.8	(3.6)	E5	丸太材付近		備前窯
28	24	陶器	盤	21.3	16.1	3.6	G5			備前窯、戦国期
28	25	陶器	鉢	19.3	—	(7.2)	B4	貝層、6層		
28	26	陶器	甕	—	—	(7.1)	G・H3	石組 14		九州系甕
28	27	陶器	擂鉢	27.6	12.8	12.1	A3	第2遺構面		備前窯
28	28	陶器	擂鉢	34.4	14.0	13.8	D2			備前窯
28	29	陶器	擂鉢	30.8	—	(5.3)	F4	建物跡【石列1】(中央)		九州系甕
28	30	陶器	擂鉢	—	—	(4.9)	B4	第2遺構面、貝層		唐津窯
29	31	陶器	甕	—	16.3	(39.5)	E4	埋甕 4		
30	32	中国製白磁	皿			(1.8)	F4			
30	33	中国製青磁	皿			3.1	A1			基筈底、高台部釉剥ぎ
30	34	中国製白磁	皿	—	9.6	(1.3)				
30	35	白磁	皿	11.2	5.7	2.1	C3	石組 12		見込み、蛇ノ目状に釉剥ぎ
30	36	朝鮮製磁器	皿	—	4.1	(1.1)	B・C4	貝層9より下位		李朝陶磁器
30	37	磁器染付	皿	14.8	9.0	3.3	D1	SK9		波佐見焼、コンニャク版
30	38	磁器	皿	—	5.9	(1.9)	E4	建物跡【石列1】(中央)		
30	39	磁器	碗	9.5	(4.0)	(4.5)	D5	石組 2		
30	40	磁器	碗	—	6.0	(6.0)	北区	第2遺構面、貝層		三島手
30	41	白磁	碗	—	4.4	(3.3)	A4	第2遺構面、貝層		
30	42	磁器	碗	—	4.5	(2.8)	D1	SK10		
31	43	中国製染付	皿	—	5.2	(2.3)	A4	貝層		高台疊付露胎、葡萄唐草文
31	44	磁器	皿	8.6	3.2	2.0	南区	第2遺構面		高台疊付露胎「大明成口」銘

図	番号	器種	器形	口径	底径	器高	地点	遺構・層位	調整など	備 考
31	45	中国製染付	皿	—	6.4	(1.3)	G4	貝層、9層		畳付露胎
31	46	中国製染付	皿	14.4	6.8	3.3	B4	貝層、第2遺構面		全面施釉
31	47	磁器染付	皿	13.4	6.2	3.0	E1	石組8	波佐見	畳付露胎
31	48	磁器染付	大皿	24.2	14.1	5.2	C1	第2包含層		宝相華唐草文、「大明成化年製」銘
31	48	磁器染付	大皿	24.2	14.1	5.2	C1	第2包含層		宝相華唐草文、「大明成化年製」銘
31	49	磁器染付	碗	9.0	—	(4.0)	D1	SK10	波佐見	草花文
31	50	磁器染付	碗	—	3.7	(3.2)	E・F4	建物跡【石列1】(西)付近	波佐見	体部 雪持笹「大明年製」銘
31	51	磁器染付	碗	—	—	(3.8)	G5 拡張区	石組溝	波佐見	唐草文
31	52	磁器染付	碗	—	—	(5.2)	F・G5	拡張区	波佐見	草花文
31	53	磁器青磁染付	碗	11.4	4.1	6.6	F4	建物跡【石列1】(中央)	伊万里	外面体部青磁 他白磁
31	54	磁器青磁染付	碗	—	4.2	(4.5)	G5 拡張区	枳	伊万里	体部 青磁 高台内 銘有り
31	55	磁器染付	小杯	—	2.6	(1.9)	B4	貝層、4層	伊万里	施釉畳付に砂付着
31	56	磁器染付	蓋	—	3.6	(2.4)	G5 拡張区	石組溝	伊万里	山水文

第5表 青銅製品観察表

第3表 土製品観察表

図	No.	材質	器 種	大 き さ (cm)	備 考
34	1	青銅	煙管吸口	3.9	残欠
34	2	青銅	煙管吸口	4.7	残欠
34	3	青銅	煙管吸口	3.4	残欠
34	4	青銅	煙管吸口	2.0	残欠
34	5	青銅	煙管吸口	3.7	残欠
34	6	青銅	煙管吸口	1.3	残欠
34	7	青銅	煙管吸口	1.3	残欠
34	8	青銅	煙管吸口	2.5	残欠
34	9	青銅	煙管吸口	5.8	残欠
34	10	青銅	煙管吸口	6.6	残欠
34	11	青銅	小柄	1.5 × 10.3	残欠
34	12	青銅	釘隠し	長 3.9、厚 0.05	
34	13	青銅	釘隠し	長 1.5、厚 0.05	
34	14	青銅	金具	3.6 × 3.6	
34	15	青銅	飾り金具か?	2.8 × 1.4	残欠
34	16	青銅	不明	10.1	完形
34	17	青銅	毛拔	8.1	完形
34	18	青銅	灰匙	長 6.9、厚 0.1	残欠
34	19	青銅	扉の金具か?	7.9 × 8.9	残欠、鉄釘が付着

図	No.	種 別	横×縦×厚さ (cm)	重量 (g)
32	1	土 錘	3.5 × 1.1 × 1.1	4
32	2	土 錘	3.4 × 1.3 × 1.1	4
32	3	土 錘	2.7 × 1.3 × 1.3	4
32	4	土 錘	10.5 × 7.2 × 3.5	223.5

第4表 古銭観察表

図	No.	銭名	材質	径 () は郭穴径	備考
33	1	開元通宝	銅	2.3 × 2.3 (0.7 × 0.7)	
33	2	天聖元宝	銅	2.4 × 2.4 (0.7 × 0.7)	
33	3	大觀通宝	銅	2.4 × 2.4 (0.6 × 0.6)	
33	4	至大通宝	銅	2.3 × 2.3 (0.6 × 0.6)	
33	5	洪武通宝	銅	2.3 × 2.3 (0.6 × 0.6)	裏面「治」、加治木銭
33	6	□武通□	銅	2.3 × 2.3 (0.6 × 0.6)	錆が厚い
33	7	永樂通宝	銅	2.5 × 2.4 (0.6 × 0.6)	
33	8	永樂通宝	銅	2.4 × 2.4 (0.6 × 0.6)	
33	9	寛永通宝	銅	2.4 × 2.4 (0.7 × 0.7)	縁の一部欠失
33	10	寛永通宝	銅	2.5 × 2.5 (0.6 × 0.6)	
33	11	寛永通宝	銅	2.4 × 2.4 (0.6 × 0.6)	
33	12	寛永通宝	銅	2.5 × 2.5 (0.6 × 0.6)	
33	13	寛永通宝	銅	○× 2.4 (0.6 × 0.6)	「永」の下方欠失
33	14	寛永通宝	銅	2.4 × 2.4 (0.5 × 0.5)	
33	15	寛永通宝	銅	2.3 × 2.3 (0.6 × 0.6)	縁の一部欠失
33	16	寛永通宝	銅	2.4 × 2.4 (0.7 × 0.7)	
33	17	寛永通宝	銅	2.4 × 2.4 (0.6 × 0.6)	裏面に「文」
33	18	寛永通宝	銅	2.3 × 2.3 (0.6 × 0.6)	
33	19	寛永通宝	銅	2.4 × 2.4 (0.5 × 0.5)	
33	20	寛永通宝	銅	2.4 × 2.4 (0.5 × 0.6)	縁の一部を欠失
33	21	寛永通宝	銅	2.4 × 2.4 (0.6 × 0.6)	2片に割れ
33	22	寛永通宝	銅	2.4 × 2.4 (0.6 × 0.6)	
33	23	寛口通宝	銅	2.3 × 2.3 (0.6 × 0.6)	
33	24	□□通宝	銅		1/2 程度欠失
33	25	□永通□	銅		1/2 欠失
33	26	無文銭	銅	1.7 × 1.8 (1.1 × 1.1)	
33	27	判読不明	銅	1.8 × 1.8 (0.6 × 0.6)	錆が厚い
33	28	判読不明	銅	2.4 × 2.4 (0.7 × 0.7)	2片に割れ
33	29	判読不明	銅	2.3 × 2.3 (0.7 × 0.7)	
33	30	判読不明	銅	2.3 × 2.2 (0.6 × 0.7)	
33	31	判読不明	銅	2.5 × 2.5 (0.5 × 0.5)	3片に割れ
33	32	判読不明	銅	1.9 × 1.9 (0.6 × 0.6)	
	33	無文銭	銅		
	34	不明	銅		2/3 欠失
	35	不明	銅		2/3 欠失

第6表 鉄製品観察表

図	No.	素 材	器 形	法 量	現 状
35	1	鉄	刃物	21.3	
35	2	鉄	刃物	1.8 × 2.8	残欠
35	3	鉄	角釘	3.3	残欠
35	4	鉄	角釘	1.9	残欠
35	5	鉄	角釘	3.9	残欠
35	6	鉄	角釘	4.0	残欠
35	7	鉄	角釘	3.9	残欠
35	8	鉄	角釘	4.4	残欠
35	9	鉄	角釘	4.4	残欠
35	10	鉄	角釘	4.9	残欠
35	11	鉄	角釘	5.5	残欠
35	12	鉄	角釘	3.8	残欠
35	13	鉄	角釘	3.1	残欠
35	14	鉄	角釘	4.9	完形
35	15	鉄	角釘	3.7	残欠
35	16	鉄	角釘	3.1	残欠
35	17	鉄	角釘	4.0	完形
35	18	鉄	角釘	3.6	残欠
35	19	鉄	角釘	7.5	残欠
35	20	鉄	角釘	7.5	残欠
35	21	鉄	角釘	7.0	残欠
35	22	鉄	角釘	10.5	残欠
35	23	鉄	角釘	5.0	残欠
35	24	鉄	角釘	4.3	残欠
35	25	鉄	角釘	5.0	残欠
35	26	鉄	角釘	4.0	残欠
35	27	鉄	角釘	4.9	残欠
35	28	鉄	角釘	4.5	残欠
35	29	鉄	金具	5.3 × 5.2	残欠
35	30	鉄	金具	2.2 × 2.2	
35	31	鉄	鉄製金具	3.1 × 2.5	
35	32	鉄	不明	10.6 × 1.7	残欠 木質が残存
35	33	鉄	不明	7.2 × 1.3	残欠 木質が残存
35	34	鉄	不明	4.0	残欠
35	35	鉄	不明	3.5	残欠
35	36	鉄	不明	2.9 × 3.9	残欠
35	37	鉄	不明	11.1	薄板を巻を巻く
35	38	鉄	不明	6.3	残欠

第7表 石製品観察表

図	No.	岩石名	岩質	用途	大きさ (cm)			備考
					長さ	幅	高さ	
37	1	砂質片岩 (緑泥片岩)		硯	(10)	(4.3)	1	広島県内では見られない。
37	2	流紋岩質凝灰岩		砥石	8.2	4.1	0.8	
37	3	流紋岩質凝灰岩	細かな縞	砥石	4.4	3.5	1.1	
37	4	流紋岩質凝灰岩	細かな縞	砥石	4.3	3.4	0.9	
38	5	流紋岩質凝灰岩	均質で緻密。	砥石	20.7	7.5	1.2	きめ細かい石英が入っている。
38	6	流紋岩質	剥離性に富む	砥石	14.9	4.3	1.2	中国地方では錦町など。広島からはあまり出土しない。
38	7	流紋岩質凝灰岩		砥石	7.8	7.7	2.4	
38	8	流紋岩質凝灰岩		砥石	12.2	6.2	2.2	
38	9	流紋岩質凝灰岩	赤・白の層	砥石	19.1	7.1	3.5	産地は山口か？
39	10	花崗岩		石臼			13.3	半径は 17.5 cm
39	11	砂質片岩 (緑泥片岩)	均質で硬い。	石斧	(14.0)	5.6	3.6	緑泥石が多い。県内では見られない。使用痕あり。

写真図版



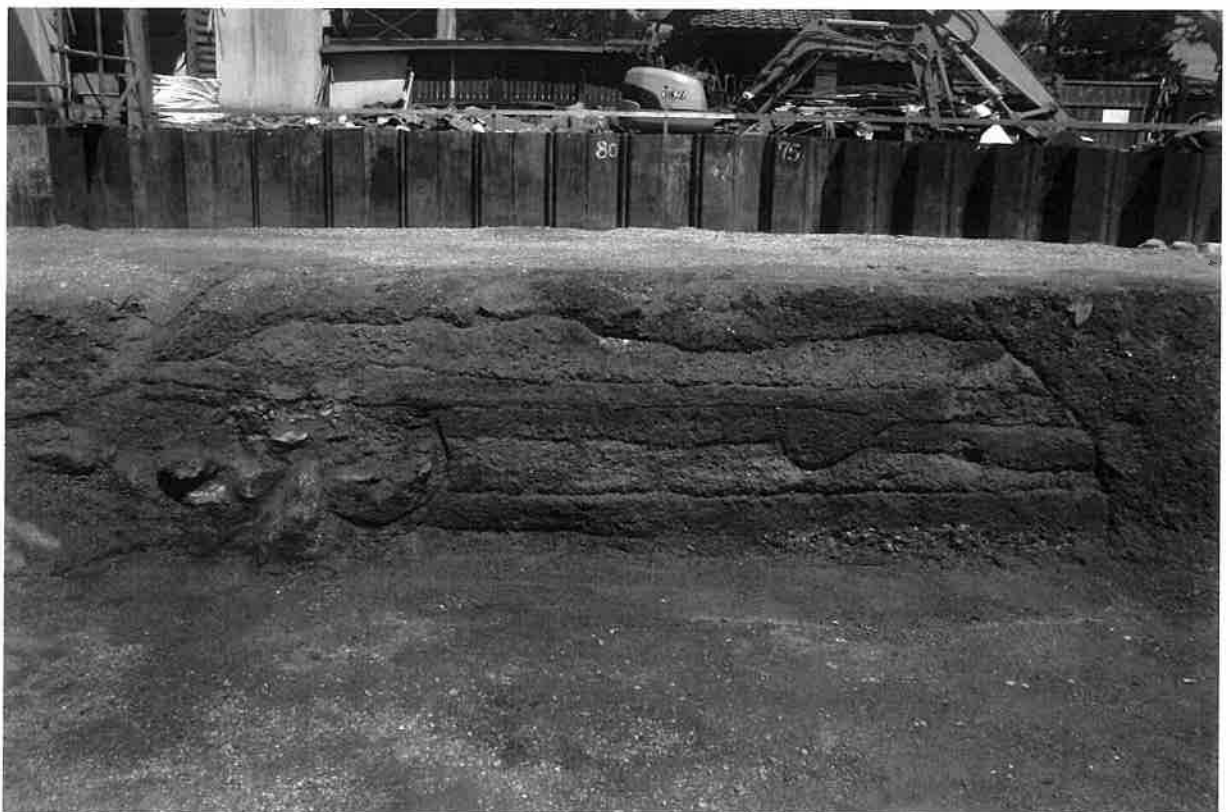
調査地遠景 多宝塔より（南から）



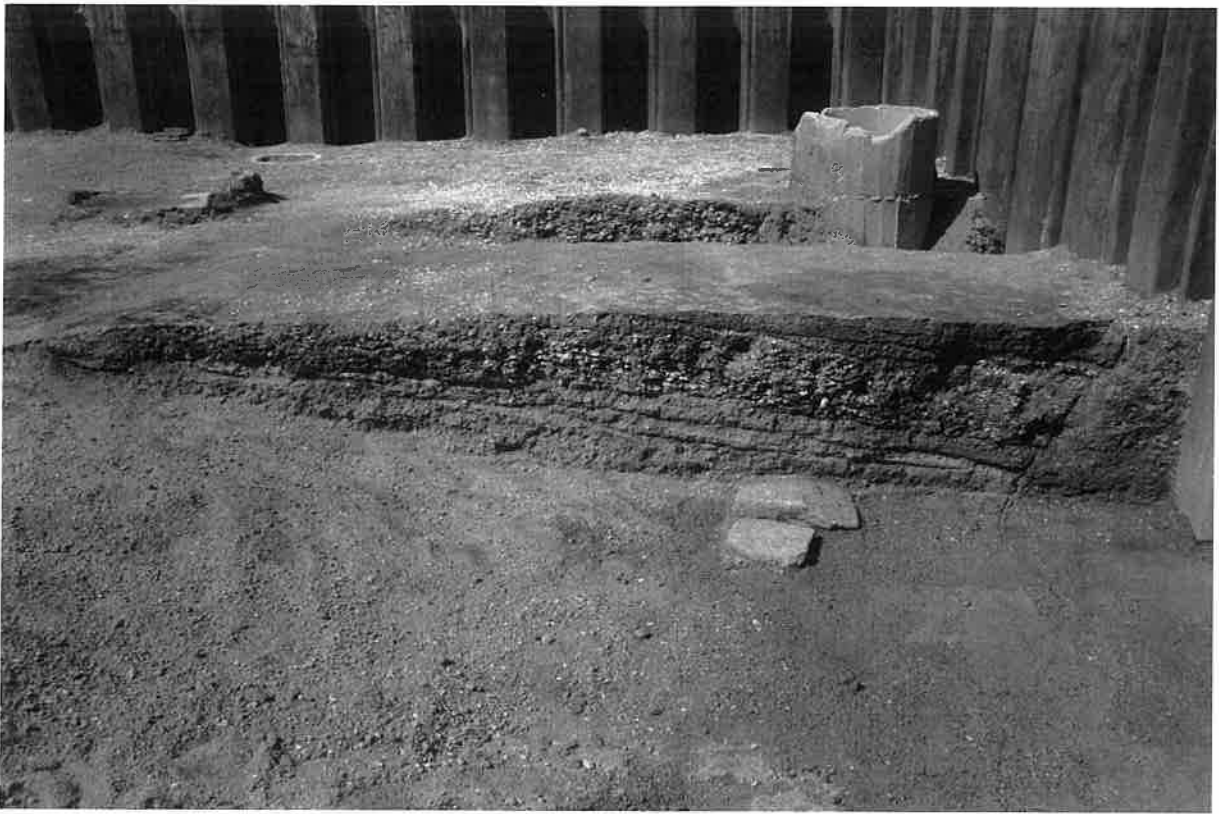
調査地近景 経尾より（西から）



東西方向土層堆積状況 西側（南から）



東西方向土層堆積状況 東側（南から）



貝層堆積状況 A-A' 断面部分 (東から)



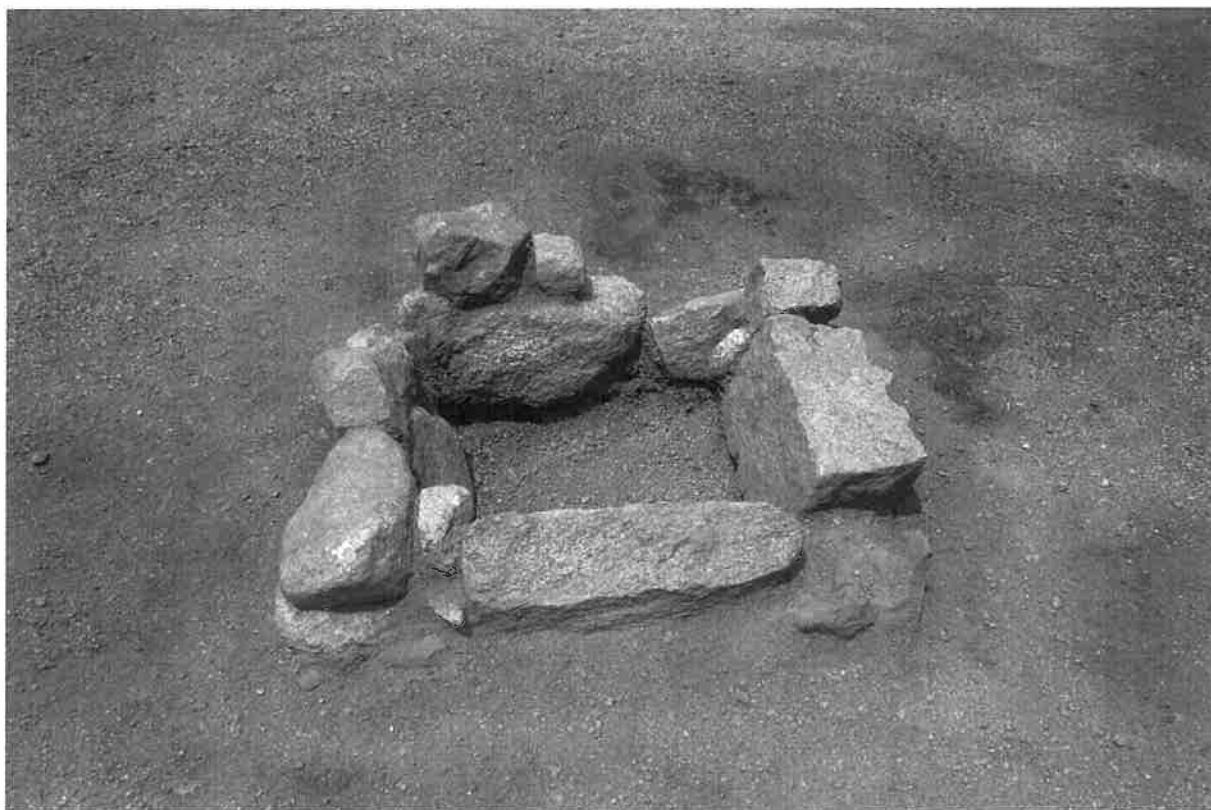
近世～近代遺構検出状況 南区 (東から)



近世～近代遺構検出状況 南区（東から）



近世～近代遺構検出状況 北区（東から）



石組6(南から)



石組7・8(北から)



石組7北壁(南から)



SE 1(南から)



埋甕 2 (東から)



埋甕 5 (東から)



建物跡【石列】全景（東から）



建物跡【石列】全景（北から）



建物跡【石列】拡張区（西から）



建物跡【石列】拡張区（東から）



建物跡【石列】石積状況(北から)



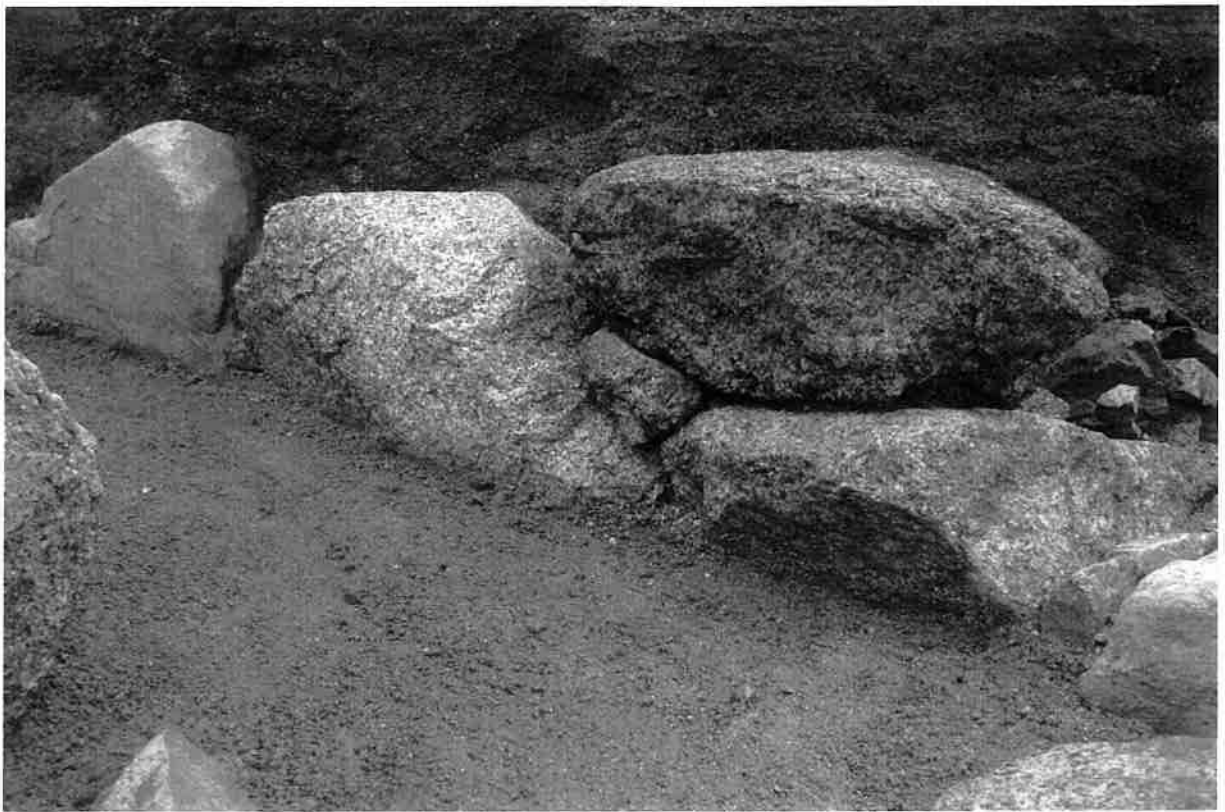
建物跡【石列1～3】状況(手前が石列3)



石垣・丸太材検出状況（東から）



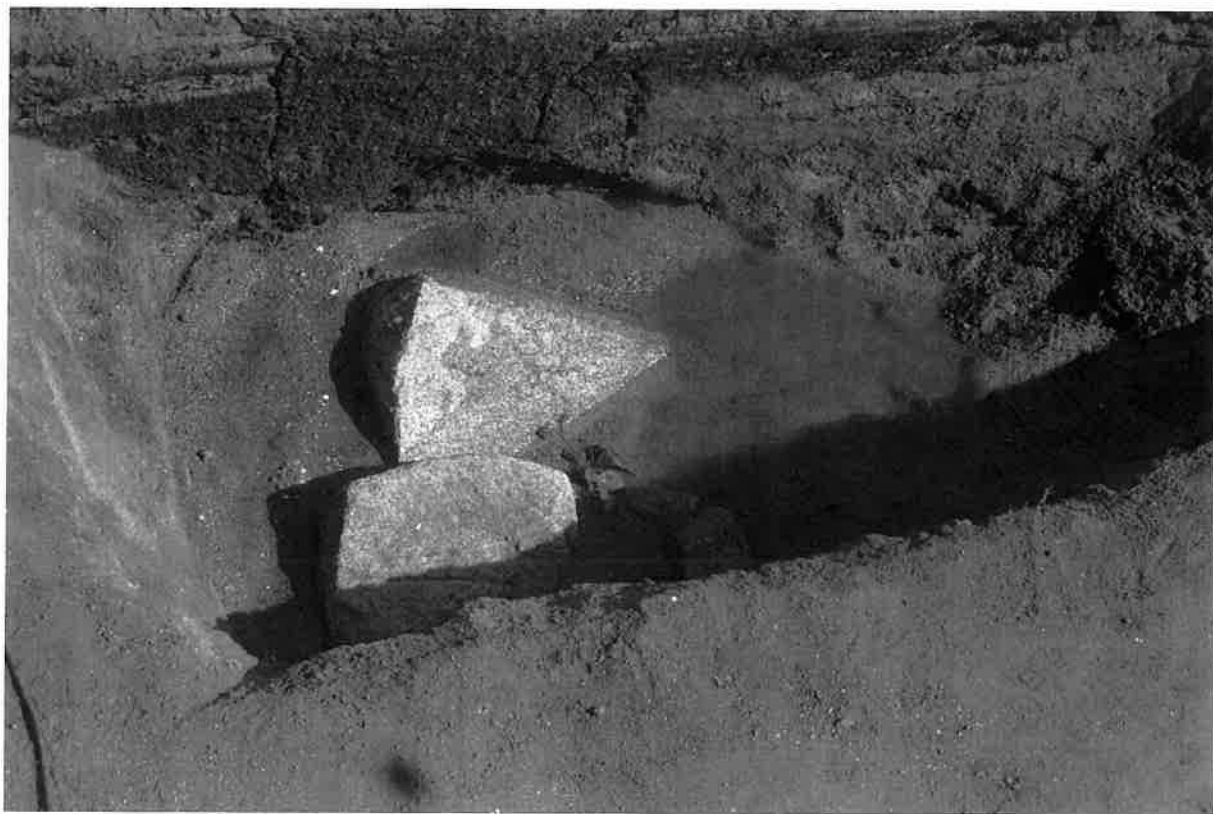
石垣 西部（西から）



石垣積石状況 西部（北から）



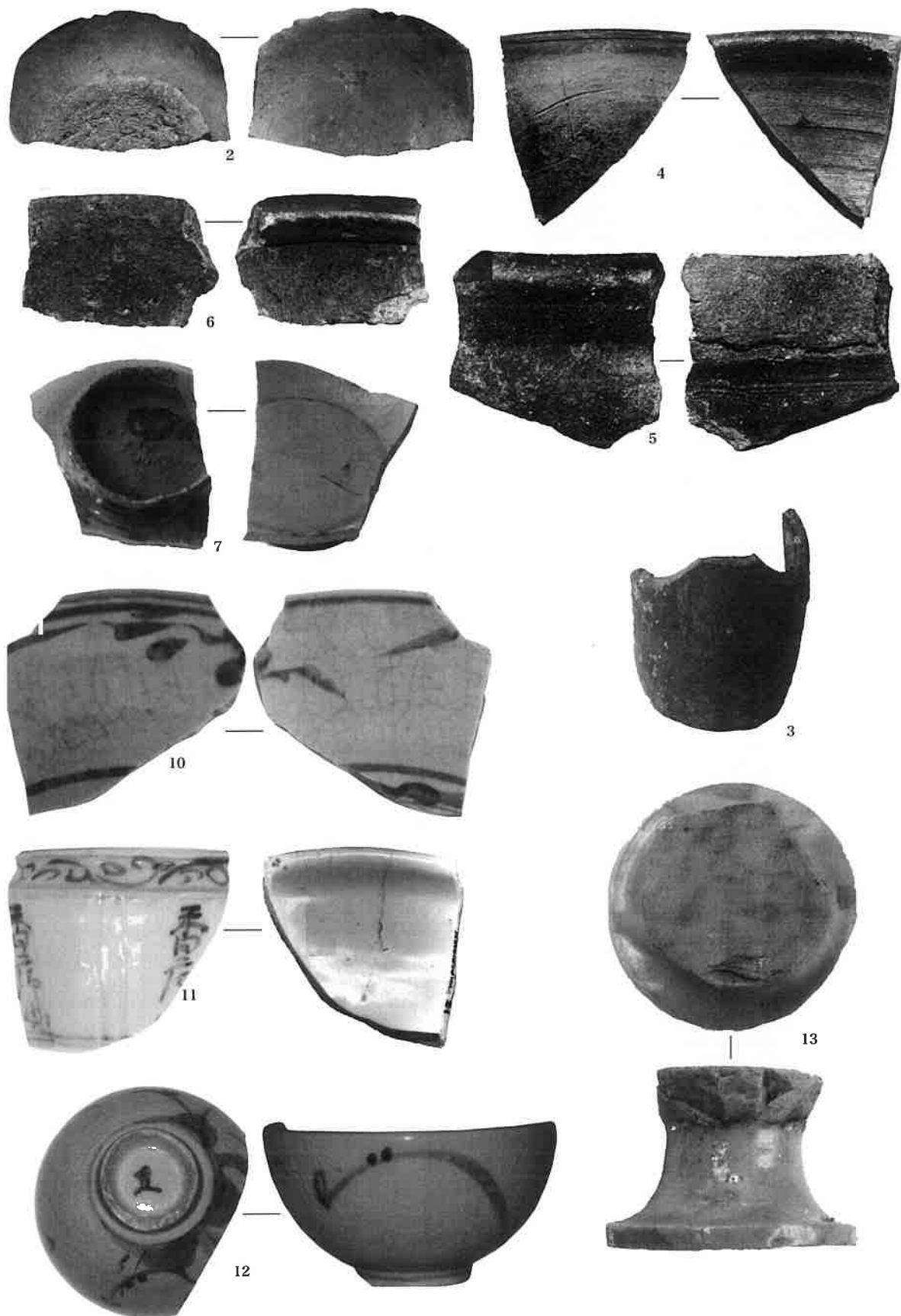
石垣（中）（東から俯瞰）



石垣 東部(西から)

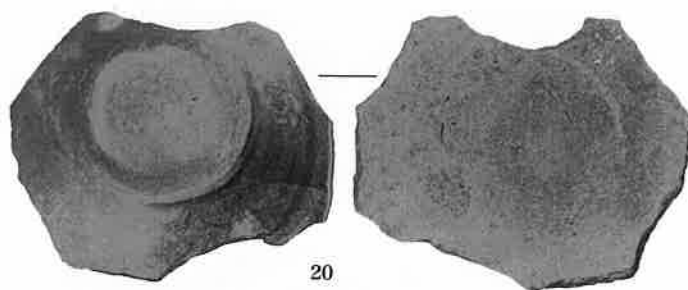


SK14 ~ 21(西から)





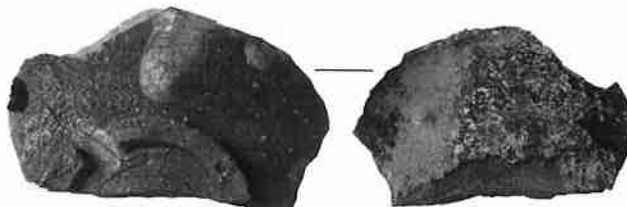
15



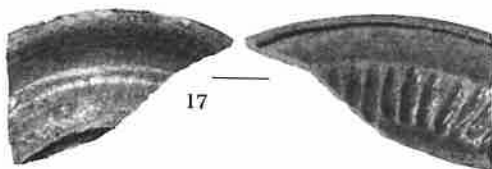
20



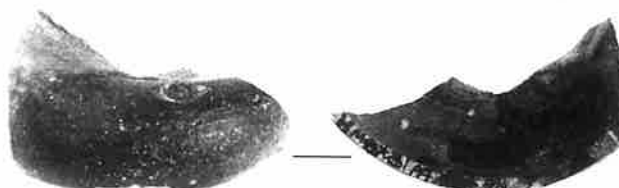
16



21



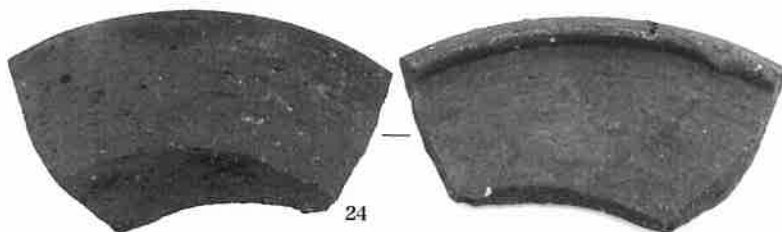
17



22



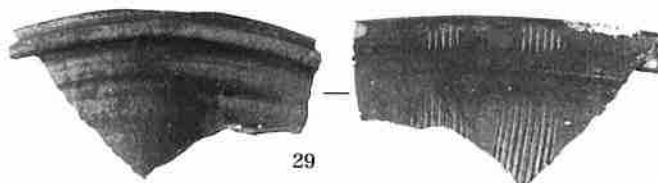
18



24



23



29



27



31



33



44



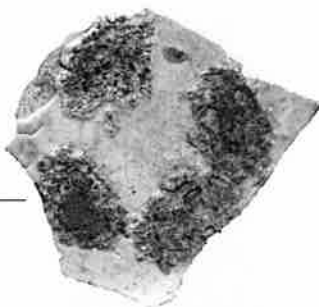
35



48



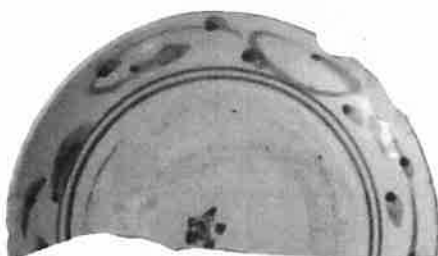
36



47



40



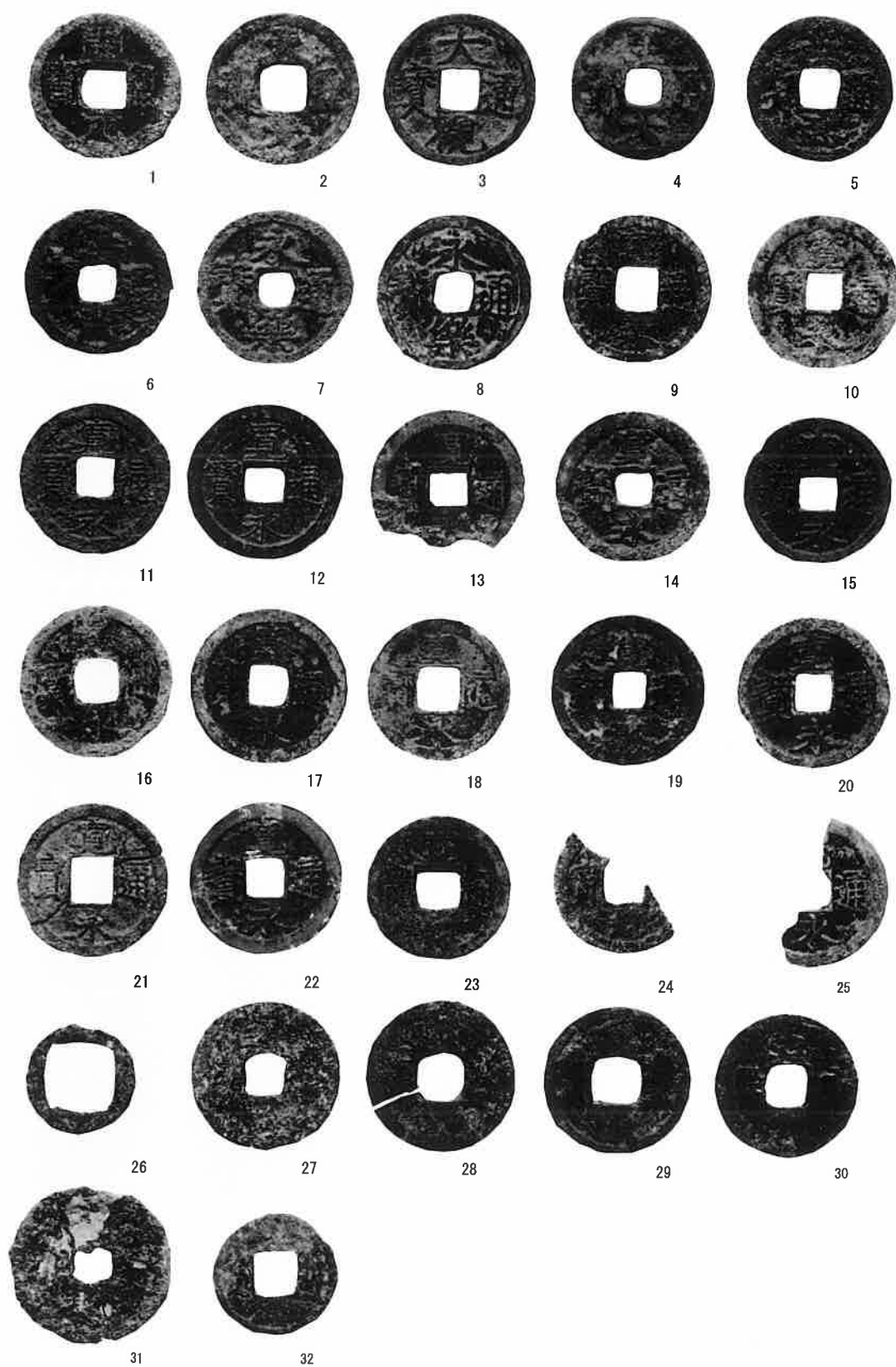
43



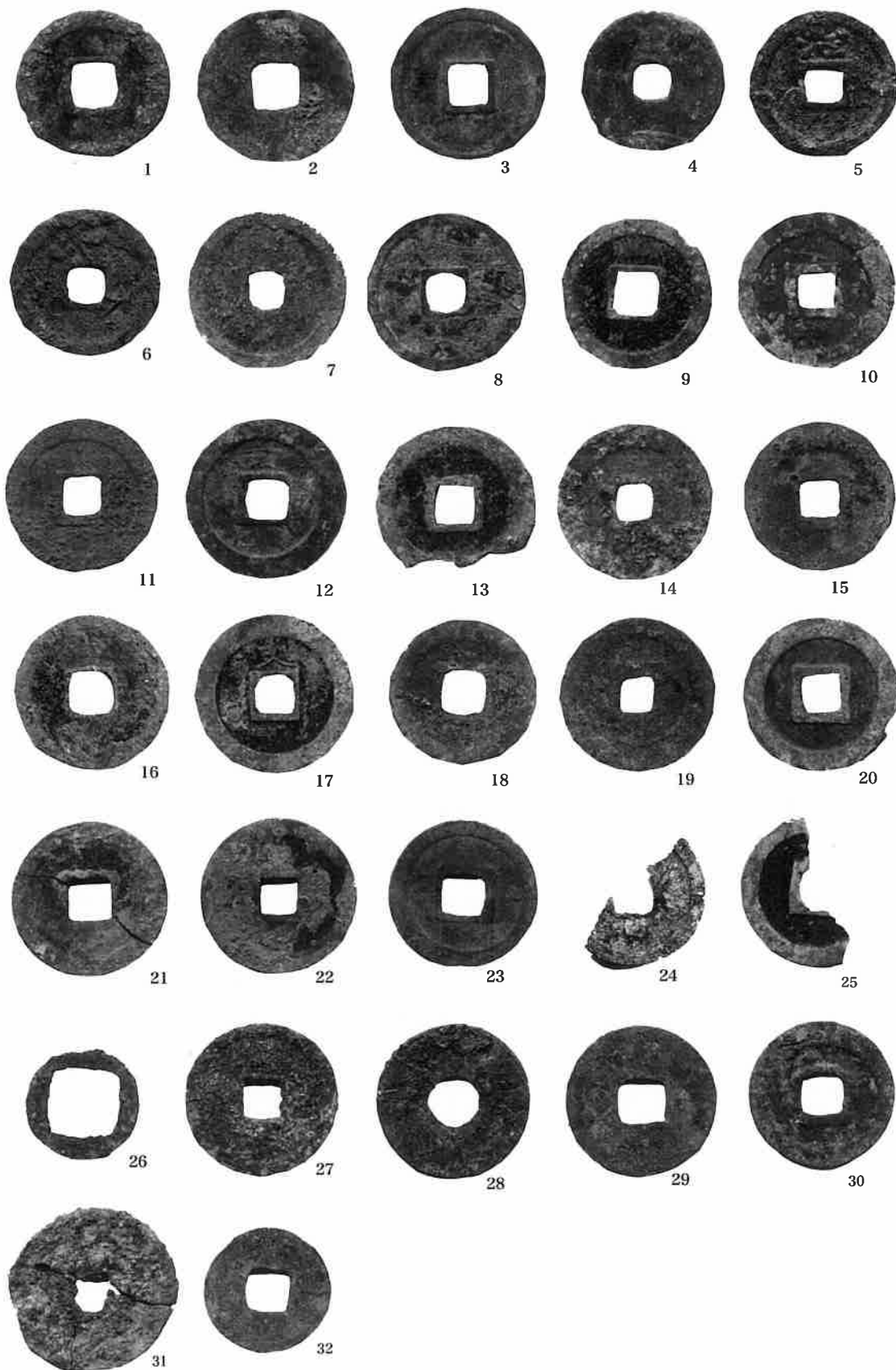
46



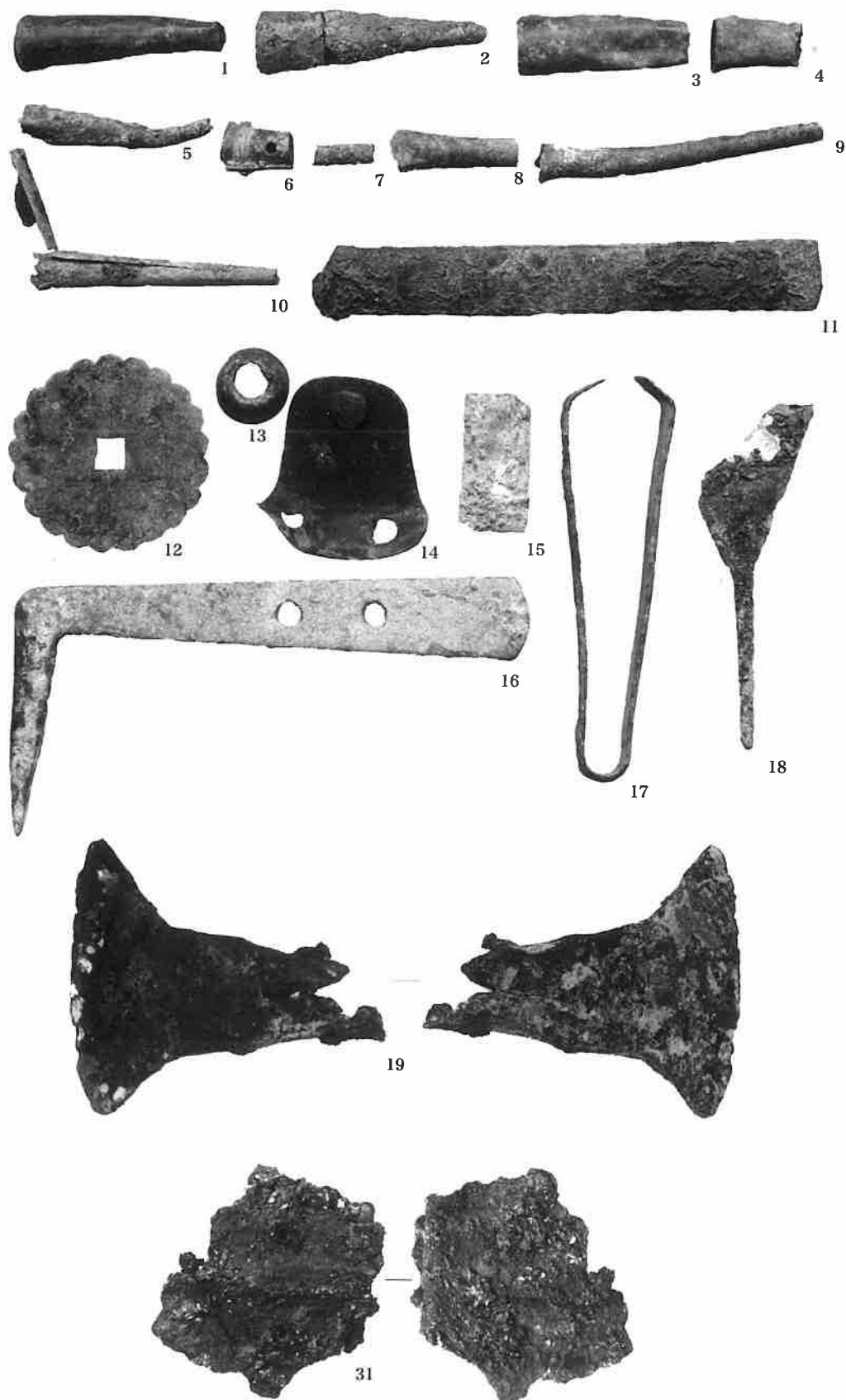
51



古錢 表面 (1:1)



古銭 裏面 (1:1)



青銅製品 1 ~ 19(19 以外は 1:1)、鉄製品 31



鉄製品



32-1



32-2



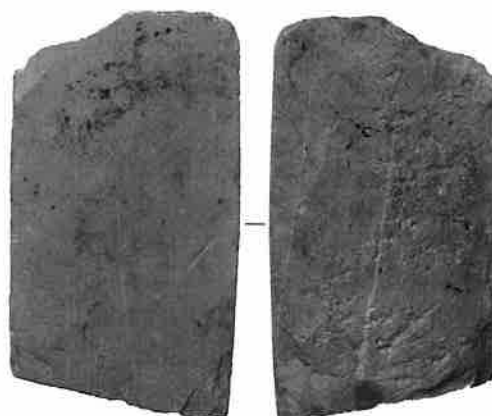
32-3



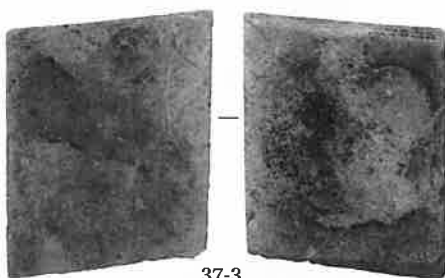
32-4



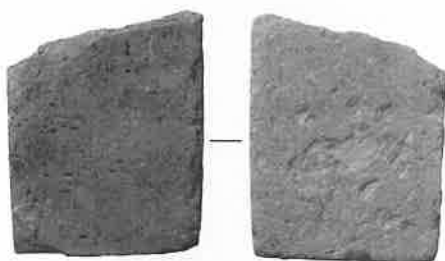
37-1



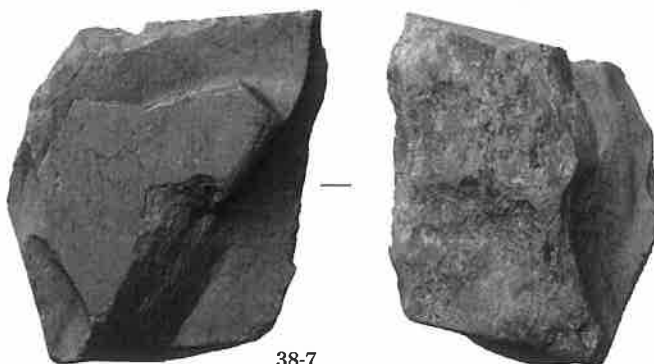
37-2



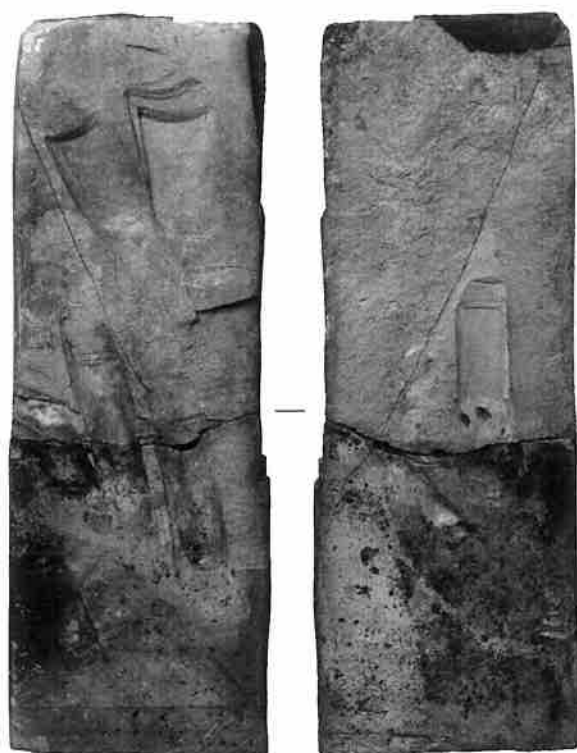
37-3



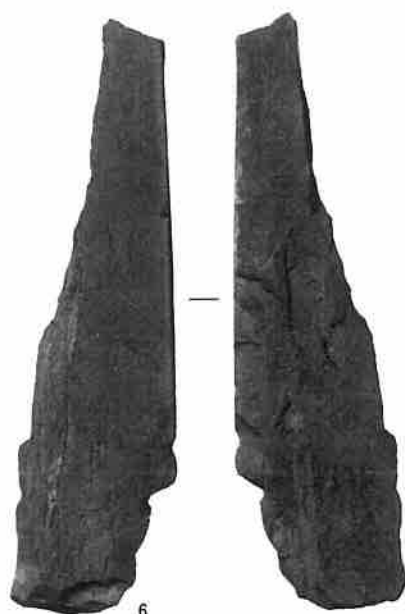
37-4



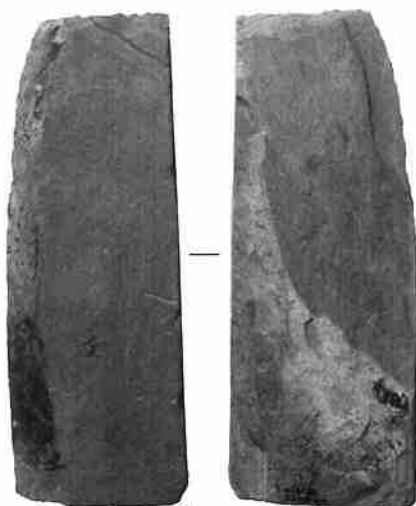
38-7



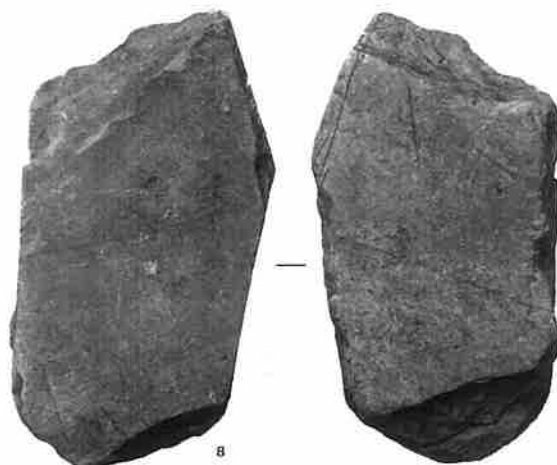
5



6



9



8



11



10

ふりがな	みやじままちやあとにしおおにしちょうだいいちちてんはつくつちようさほうこくしょ					
書 名	宮島町屋跡西大西町第 1 地点発掘調査報告書					
副 書 名	(仮称) 厳島美術館建設に伴う発掘調査の記録					
巻 次						
シリーズ名						
シリーズ号						
編著者名	是光吉基・百瀬正恒・岡崎環・藤田広幸・田宮憲明					
編集機関	廿日市市大西町発掘調査団					
所在地	〒 738-8501 広島県廿日市市下平良一丁目 11 番 1 号					
発行機関	廿日市市大西町発掘調査団					
所在地	〒 738-8501 広島県廿日市市下平良一丁目 11 番 1 号					
発行年月日	平成 21(2009) 年 3 月 31 日					
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号			
みやじままちや あと 宮島町屋跡 にしおおにしちょう 西大西町 だいいち ち てん 第 1 地点	ひろしまけん 広島県 はつかいちし 廿日市市 みやじまちょう 宮島町 にしおおにしちょう 西大西町	34213		2008.8 ~ 10	700 m ²	(仮称) 厳島 美術館建設
所収遺跡名	種別	主な年代	主な遺構	主な遺物	特記事項	
宮島町屋跡 西大西町第 1 地点	護岸堤防 町屋 町屋	中世 江戸時代 明治時代	石垣・建 物跡【石 列】・土 坑・石組	土器・陶磁器、 土錘、古銭、青 銅製品・鉄製品、 硯・砥石・石臼		

特別史跡及び特別名勝 厳 島
宮島町屋跡 西大西町第1地点 発掘調査報告書
—(仮称)厳島美術館建設に伴う発掘調査の記録—

発行日 平成 21(2009) 年 3 月

編集発行 廿日市市大西町発掘調査団 Tel (0829)30-9205

〒 738-8501 広島県廿日市市下平良一丁目 11 番 1 号

廿日市市教育委員会教育部文化スポーツ課内

印刷 〒 600-8803 京都市下京区中堂寺藪ノ内町 4

株式会社 京都こびい
